

昭和四十四年三月

宮崎県文化財調査報告書

第14集

宮崎県教育委員会

昭和四十四年三月

宮崎県文化財調査報告書 第十四集

宮崎県教育委員会

昭和四十四年三月

宮崎県文化財調査報告書 第十四集

宮崎県教育委員会

目 次

一、綾町地下式古墳調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	一頁				
一、延岡市琴坂の箱式石棺調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	一頁				
一、えびの町平松の地下式古墳調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	二二頁				
一、高崎町塙原地下式古墳調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	二二頁				
一、延岡市古川町削抜石棺の遺物調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	二二頁				
一、高千穂町香平原横穴古墳調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	二二頁				
一、高城町牧ノ原遺跡調査報告.....	興文化財専門委員	石川恒太郎	二二頁				
一、国富町本庄地下式第二号墳調査報告.....	興文化財専門委員	三一頁					
一、椎葉村松尾のイチヨウ.....	興文化財専門委員	四〇頁					
平 石 石 石 石 石 石							
田 川 川 川 川 川 川							
正 恒 恒 恒 恒 恒 恒							
太 太 太 太 太 太 太							
一 郎 郎 郎 郎 郎 郎							
六六頁	五六頁	四八頁	四四頁	四〇頁	三一頁	二二頁	一頁

東諸県郡綾町地下式古墳調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

東諸県郡綾町大字入野字四反田は高さ約六〇mの台地で、ここに感土の凹墳二基があつて県の指定となつてゐる。台地上は畑地であるが、この台地に畑改良事業を行なうためブルトーザーで整地中に昭和四十三年一月二十一日ブルで地下式古墳の天井の一部を破壊して穴があいたため地下式古墳であることが知られ、同町教育委員会に報告された。町教育委員会ではこれを確認して県教育委員会に報告し、工事の関係で早急な調査を依頼してきただけで県教育委員会では社会教育部の荒武主幹と私とが翌二十二日出張して調査した。また同町の文化財保護調査委員吉川親雄、長池丈夫の西氏も立合われた。

二、古墳の構造

この台地の地質構造は上部に厚さ四〇cm内外の黒色の表土がありその下に厚さ二〇cmと三〇cmの黄色のローム層があり、その下に厚い褐色の粘土質土層があるが、この古墳は粘土質土層内に^{せんぞく}玄室^{げんしつ}を設けていた。もともと古墳のあつた現場は整地のため表土は幾分浅く削られていていた。

この古墳は第1図に見られるごとく、ほぼ南北に方位し、玄室を北に葬道と^{さざなみ}壁穴を南にして造られていたが、正しい方位は古墳の中軸線

(A-B)は南北より約三〇度東に傾いていた。従つて東北より南西に方位しているという方が眞に近いかも知れないが、説明を簡略にするため「ほぼ南北」とした。

玄室は葬道の方向に真角に長い長方形で、東西の長さ二・六〇m、南北の長さ二・〇八mであるが、北壁の中央が可なり外側に膨れ、東壁は西壁より全体に一二〇cmと一三〇cm南にずれている。北壁の長さは両端の距離が二・六〇mで、その中央や東寄りを頂点として三〇cm北に張り出している。西壁はそれに直角に長さ一・六〇m、東壁も北壁にはほぼ直角に長さ一・六四mである。南壁は葬道によって東側と西側に二分されているが、東側は東壁の南端からほぼ直角に一mで葬道の東壁に接し、西側は西壁の南端から約八〇度南方に開いて長さ五〇cmで葬道の西壁に接している。そして葬道の巾は両接点で一・二〇mある。玄室の壁はやや内側に傾いており、天井の高さは最高部で九三cmであったが、壁には棚状の施設ではなく、天井も屋根形ではなくいわゆる穹窿形に近い。

玄室の床面には、葬道との接点附近を除いてほぼ全面に大小の自然石が敷かれていたが葬道のある兩壁を除いて、北、東、西の三方の壁には、その根元に大きな石が斜めに立てられていた。そして玄室の中央よりやや北寄りの石敷の中央に足を西に、頭を東にして人骨一体が

伸展葬されていた。頭蓋骨などは上部天井の崩壊のため壊れていたが、大腿骨や脛骨、膝骨など足部の骨はよく残り、ほとんど動いていなかった。そして骨のあった範囲は西壁の東方三五〇cmのところに足の指骨などがあり、腰骨は同五五〇cmのところから同九〇cmのところ、それに接して大腿骨があり、それから東方の骨は可なり動いていた。これは北壁の一部崩壊と天井部の崩壊、それと一二の人の出入りによるものと思われる。しかし東壁から五六cmと七〇cm西方（西壁から一・九〇m東方）に須恵器と埴器の蓋杯が重ねて置かれ、これは動いてなく、しかも人骨の線上にあったから頭蓋骨はこれまで伸びていなかつたことが知られた。そうすると人骨は西壁の東方三五〇cmから一・九〇mの間にあつたことになり、ここに葬られた人は一・五五m内外の身長の人であったことが想像される。また大腿骨は長さ四二cm、脛骨は三五cmが測られた。その他の遺物は、前に書いた須恵器と埴器の蓋杯のほか、その南方四〇cmのところに須恵器の蓋杯が裏返しにして置かれ、その東北方六〇cmのところにも須恵器の蓋杯が裏返しにして置かれていた。そのほかには何らの遺物もなかった。

義道は前に記したごとく、南壁の東端から一mのところと、西端から斜め五〇cmのところに接しているが、西側の接点は東側の接点より二二〇cm南にずれ、全体に漏斗状をなしている。すなはち北側の接点（玄室の入口）の巾は一・二〇mで、堅穴への接点（義道の入口）の巾は六七cm、長さは九〇mであるが、西壁は外方にやや湾曲している。

高さは玄室の入口で五五cm、堅穴の入口で八〇cmで、その底部は玄室の床面と同じ高さであった。

堅穴はその両面に接し、長さ一・二〇m、巾一・八mの長方形で、義道はその北壁の東端から三〇cm、西端から二二〇cmのところに開いていた。堅穴の深さは一・二〇mで、義道の入口の手前から二〇cmぐらいい傾斜して義道の底に達していた。從って堅穴の底は義道と玄室の床面より二〇cm高いわけである。普通の堅穴では義道の入口は石をもて閉塞されているが、この古墳では義道を閉塞した石ではなく、玄室の入口には堅穴の土が流れ込んでいたから、義道は土で閉じられていたことが知られた。

三、副葬品

この古墳の副葬品は、前に書いたごとく埴器の壺一個と須恵器の蓋杯五個、壺一個の計七個の土器のみであった。（写真1、2参照）

1 壁器、壺

これは遺骨の頭蓋骨の東と思われる場所に須恵器の蓋杯(2)と何れも口を下にして重ねて置かれていたが壺である。直径一三・二cm、高さ四cmである。（写真1、2の右下）重ねてあった須恵器の蓋杯(2)と合せると良く合致するから、これをセットをなす蓋杯の身であることが知られる。

2 須恵器 蓋杯

これは右の埴器と重ねてあったもので（写真1、2右上）直径一四・三cm、高さ三・七cm、口唇の径は一二cmで口唇の高さ一・一cmであ

写真1・被町地区下式古墳出土の土器

(右下段は壺、その他は須恵器、

左下段は甌、その他の須恵器は盤等)



写真2 同上裏



る。埴器の壺とセットをなすものであるが表面の頂上部に梵描きの十字形のサインがある。(写真3参照)

3 須恵器 蓋壺

これは前記のものの西南方五〇㍉のところにあつたもので口を上にしてあつた。(第1図7) 直径一四・三㍉、高さ三・四㍉で、口唇の径一一・八㍉、口唇の高さ〇・六㍉で、これにはサインはない。(写真1、2の左上)

4 須恵器 蓋環

これは大顎骨の南方六〇㍉のところにあつたもので、これも口を上にして置かれていた。(第1図5) 直径一五・五㍉で一番大きい(写真1、2の左から二番目)が、高さは三・七㍉、口唇の径一三㍉、口唇の高さ一・一㍉で、これにもサインはない。

5 須恵器 壺

これは(3)の蓋壺の東方一五㍉のところにあつたもので(第1図8) 直径一三・四㍉、高さ三・六㍉の壺である。口縁部に一部欠損があり(写真1、2の左下) 底部の表面に筆書きのサインがある。(写真4 参照) そしてこの壺は(3)の蓋壺(写真1、2左上)と合わせるとよく合致するし、在った場所も近いので、この蓋壺の身をなすのではないかとうかと考へられる。

6 須恵器 蓋环

これは最も南壁に近く、(3)の南方四〇㍉のところ(第1図9)にあつたもので、次の蓋壺と重ねて口を上にしてあつた。(写真1、2の右から二列目上) 直径一四・二㍉、高さ三・二㍉、口唇の径一一・六

写真3 十字形のサインのある蓋環



写真4 サインのある壊



写真5 サインのある蓋壊



写真6 サインのある蓋環



（四、口唇の高さ〇・六cmで、これにも表面の頂上部に「の」の字を左書きしたような形の鉛描きのサインがある。（写真5参照）

7 須恵器 蓋環

これは前記の（6）と重ねて置いてあつたもので（写真1、2の右から二列下）直径一四・二cm、高さ三・四cm、口唇の径一・七cm、口唇の高さ〇・七cmで（6）に似ているが些少ながら（6）より大きく、（6）は頂上部が扁たく、かつ頂上から半径五cmのところに深い溝状のものがぐつっているが、これにも残いそれがあるが頂上よりなだらかに口縁に降っている。そしてこれにも表面頂上に「の」の字を左書きしたような溝巻様の鉛描きのサインがある。（写真6参照）

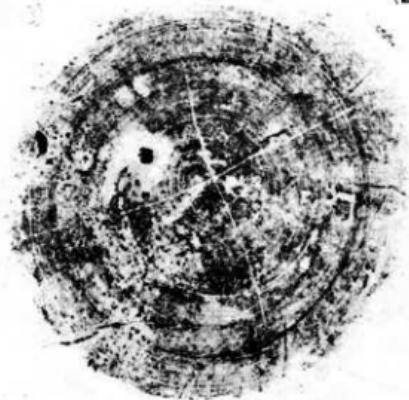
四、古墳の年代と特長

この古墳は地下式古墳であつて、地下式古墳の年代については諸説があるが、この形式の古墳は宮崎県南部を中心とする南九州のみに存在するもので、従来われわれの調査したところによると古墳時代以後のものとなす定説は当らない。少なくとも西暦五世紀（古墳時代中期）に遡るものがあると信じている。しかし地下式古墳にも形式上の差が多く、これらの形式の変化は年代の変化を示すものと考えられるが、この綾町の地下式は、その形式が葬道の方向に直角の玄室を有することや須恵器や埴器の形式などから見て、やはり古墳時代後期（七世紀頃）のものと考えられるのである。

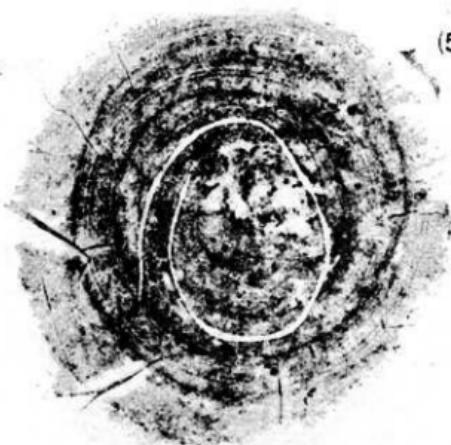
この古墳の特長としては、玄室内の葬法に注目すべきものがある。それは床面の敷石のほかに、壁の根元に大きな石を斜に立てかけてい

拓撮 I 須恵器のサイン

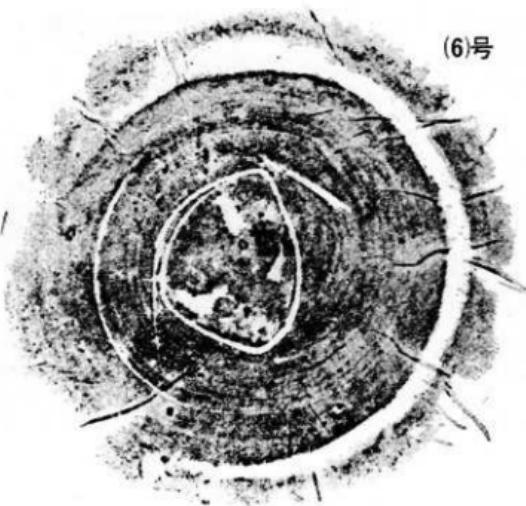
(2)号



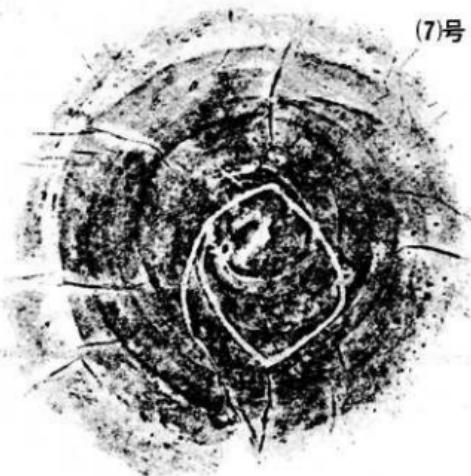
(5)号



(6)号



(7)号



ことである。このような例は後に発見された同郡国富町大字深年字市ノ瀬の地下式第一号壙その他でも見られたことであるが、当代人の一種の葬法として注意すべきものである。なお地下式古墳は必ずしもみな玄室の床面に石を敷き詰めるものとは限らないが、石を敷き詰めているものは、それだけ叮重に費されているわけで、被葬者の身分の高さを示すものと思われる。

副葬品として武器も裝身具もなく、上器が七個、それも环や蓋環という食器だけであることも極めて特異なものである。七個ではあるが蓋と身とセットをなす蓋環二個と、蓋環の蓋だけ三個と見ることもできる。さらに注目すべきは須恵器に記されているサインである。前に記したことく、(2)号の蓋環には十字形、(5)号と(8)号と(7)号とに何れも「の」の字を左書きにしたような洞巻様のサインが籠書きされている。このようなサインは須恵器にはよく描かれているもので、一般に窯印と見られている。(つまりこの物を焼いた窯の陶工が施したサインと見られているのである。) そうすると、(2)号の十字形のサインのある蓋環と第(6)号以下三個の「の」の字の左書き形のサインのある蓋環および环とはこれを焼いた窯が異なるものと見られる。(拓影1参照) そうすると、この古墳に葬られている人は十字形窯印の窯で焼いた土器と、「の」の字の左書きのよう窯印の窯で焼いた上器、および無印の窓のものとの三通りの窯の土器を所有していたことになる。いうまでもなく当時の土器は环や蓋環ばかりではなく、鉢、碗、瓶、盤、提瓶、横敷、平瓶、鍵、その他種々のものがあった。これらのうちこの古墳にはその一部が埋葬されているのであるが、その中にこのよう

な窯印を異にするものが、同じ古墳内にあるということは、土器製作の場所について多くの示唆をなすものといわねばならない。宮崎県においても須恵器の窯址は若十見いだされているが、これらの窯印によってその製作地が突き止められる日も遠くないであろうと思われる。

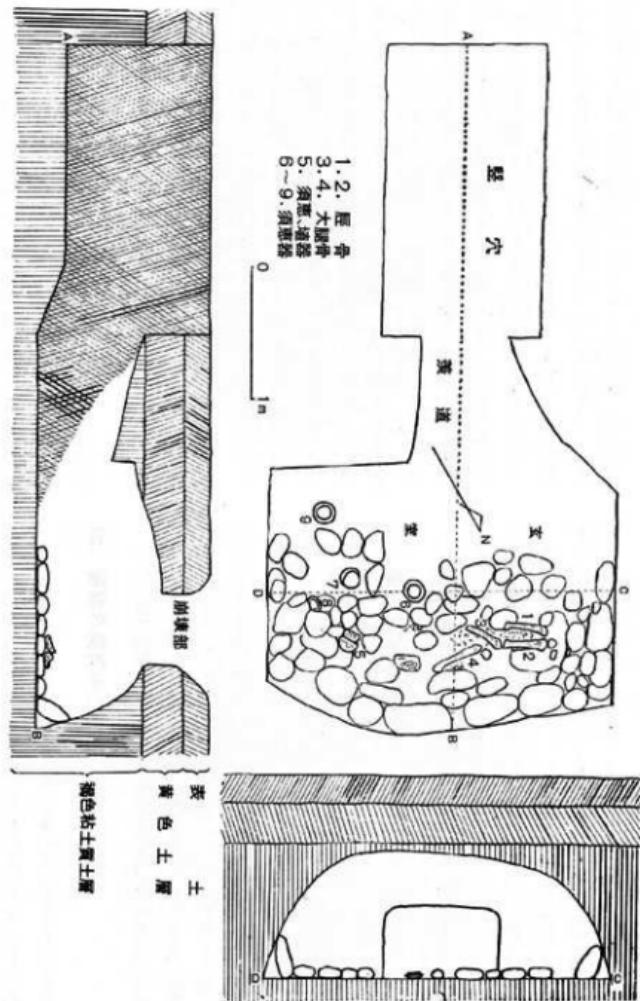
五、遺物の保存その他の

この古墳で発掘した遺物は一応県立博物館に持ち帰ったが、當時同館には学芸員が欠員中であり、整理が困難であるから、整理を終って持参されたいということであったので、自宅で整理したが、綾町の教育委員会では切角町内で出たものであるから少くとも半数は町で保管したいとの要望であったので、県社会教育課に納め同町との話し合いで保管方を決定してもらうこととした。何れにしても遺物の所在を明確にして後世に伝えることが望ましいと思う。

六、周辺地域との関係

東諸県郡綾町で地下式古墳が発見されたのはこれが最初であった。しかし地下式古墳は西都原以南の県下に夥しく分布していることは風に知られている。最近昭和四十二年十二月から四十三年二月にかけて発見された地下式古墳について述べても、同郡国富町大字須志田字飯盛の二基、同町大字深年字市ノ瀬の四基があるが、綾町の大字入野は右の国富町飯盛の地下式古墳群を距ること二・五キロの西方にあり、その間に深年川が流れて、その東西に対立している台地である。また同町大字深年字市ノ瀬とは、同じ深年川を距ててその南方約二

第1圖 綏町地下式古墳墓剖面圖



五キロに対立する台地である。このように三角形の頂点のような三ヶ所の台地上に地下式古墳が群在することは、この地方一帯に群在することを示すものと考えられる。そしてこれから一方には野尻町、小林市を経てえびの町へと繋がり、他方では高城町から高崎町、都城市へと繋がる地下式古墳の分布に統くものであって、この古墳もこのようない宮崎県地下式古墳群の一環につながるものということができる。

延岡市琴塚箱式石棺調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

延岡市稻葉崎の琴塚は、自然の丘地を利用した円墳で、古くから琴塚と呼ばれ、頂上に小さい祠があるが、この丘の東麓および北麓には多くの箱式石棺があり、すでに七八基が掘り出された。それで市では、この台地上に古墳の標示を行うとともに、古墳の範囲を示す境界標を建てているのであるが、今年になってこの丘地の西側を住宅造成中で、ブルトーザーをもって山を削り取った。そればかりではなく、さらに古墳の境域内にまで入り込んで、山を削り取つたため、箱式石棺の一部を破壊し、石棺内的一部と、そこに入っている人骨が見えるようになつた。それで市教委では工事を中止させ、県教委に連絡してきた。そこで昭和四十三年三月九日延岡市に出張、同市社会教育主事甲斐常美氏らの協力のもとに翌十日までかかつて発掘調査を行なつた。なおこの石棺に入っていた刀を、附近の中学生が棺から引き抜いて学校を持って行つたのを、担任の教師が教材としていたが、これを知つた甲斐主事が回収して市の社会教育課に置いてあつた。

二、発掘調査の経過

現場は延岡市襟山の北方で、襟山の丘地が稻葉崎から夏田に通する道路で切られた北側にある丘地で（図版1参照）東方の馬場畑にある

天神社鎮座の大前方後円墳と対立している丘である。この丘の北方なる小桙の蛇谷は最近開発されて県立延岡商業高校が建てられたのを始め、桜ヶ丘団

地のニュータ

ウンが建設された。そのた

めか、この附

近に小さい住

宅群が続々建

設されてお

り、一種の住

宅造成ブーム

をなし、この

山の切り崩し

もそうした住

宅供給者の仕

業らしく、丘

地は大部分が



図版1 延岡市稻葉崎琴塚附近（×印）

写真1 箱式石棺が現われた状態

(右側にブルトーザーの爪跡が見える)



で区長が管理しているとのことであった。しかるに古墳が発見され、その事が新聞等で広く知られるに及んで境界の論争が行われるに至った。そしてわれわれの発掘中に両者の対立論争が見られたのであった。

現場の状況は写真1、に見られるごとく、ブルの爪にかかる箱式石棺の西端の側石が飛ばされて石棺内が穴状をなして見られるに至つたのである。山は砂岩の風化した岩山で、石棺はその岩山を掘って埋められているが、写真1、に見える上方の白い土はブルがもつててきた土で、この山の地表は、その下に右から左に傾斜している黒い部分である。石棺は極めて浅く掘り込まれていることが知られる。またこの傾斜の状態から見て、上には盛り土（封土）がなかつたことが知られる。

そこで上の上を除くと写真2、に見られるごとく、千枚岩で作られている箱式石棺が現われたが、石棺は大小の千枚岩をもつて蓋をしており、蓋は下に大きな石五枚を並べ、その間隙には小さい石をはめて粘土で目張りをさし、さらに石の縫目に四枚の石を載せており、築造は極めて嚴重であった。

蓋石を除くと棺の身が出てきた。写真3、は、その状況を示す。棺内には多くの遺物があったが、まず石棺の構造から説明しよう。

1. 石 棺

石棺は前に記したごとく、簡單な千枚岩の自然石を用いて造り、棺はほぼ東西に方位しているが、その軸線は東西より約二〇度北に傾いている。その構造は棺の蓋がそうであったごとく、身もまた頗る嚴重

写真2 石棺に蓋をしている状態



写真3 石棺の蓋を取った状態



で、両端は各一枚の石であるが、西側の石はブルによっては飛ばされて、すでに存在しなかった。南と北の両側面は、それぞれ二枚の石を立てて造られており（写真5、および関版2、参照）。西側の石が乱されているのはブルのためであろう。さらに注意されるのは、東の端は大きな石を斜めに立てかけて棺石の崩壊を防ぎ、南北の両側面もそれ

ぞれ大きな石四枚と小さい石数個を斜めに立てかけて棺の崩壊を防ぎ、さらに石と石の継ぎ目には粘土を詰めて目張りをしていた。このような厳重な施設がなされたいた石棺は當て見なかつたもので、このために人骨その他の遺物がよく保存されたわけである。

石棺は現存の棺身の長さ一・九m、巾内側で東端が五〇cm、西端が二五cm、深さは約二五cmで、棺の中央部がやや瘦み、縱断面は舟形を呈している。そして棺底には写真6、に見られるごく薄い小形の石を敷きつめ朱が施されていた。また棺底は関版2、の横断面に見られるごとく、両側より中央がやや傾んでいた。

2. 遺 物

棺内の遺物は人骨一体と刀一口、鉄鎌一八本および玉類であった。

a. 人骨一体

写真3、および写真4、に見られるごとく、人骨は頭部を東にし、足を西にして伸展葬されていた。写真2、に見られるごとく巾広い千枚岩をもって棺の東部が蔽われていたのは、頭部を守るためにあったと理解される。從つて人骨はほとんど完全に残っていた。ただし上顎骨と下顎骨が少しづれ違っていることが写真4、で見られるが、これは自然の震動でこのようになつたものと思われる。また大顎骨が乱れ

ているのは、ここにあつた刀を中学生が取り出したとき乱れたものであろう。骨の遺存した範囲は長さ一・四四mであるが西端部が壊れているので原形を知り得ないことは遺憾である。しかしこれらの骨格から見て廿年男子の骨と思われる。

b. 刀一口

刀は発見後まもなく、附近の中学生が棺内から引き出して中学校に持つて行つていたのを延岡市教委の甲斐主事が回収して、同市社会教育課に保管されていたが、先端の鋒の部分が欠損していた。われわれは念のため、この刀を現場に持参し、それが棺内のどの位置にあったかを調べることにした。この場合、狙いは言うまでもなく欠損部の鋒が棺内に遺存してはいないかということであった。しかしにその欠損部は大腿骨と骨盤との間に、刃を南に向けて存在していた。それでこれに刀を合わせると、刀の位置は棺のほぼ中央に併行して遺体の北側に置かれ、柄は西端の石に接していたことが知られた。写真7、は刀を原位置に置いたところである。この刀は全長九四cm、うち柄部の長さ一八cm、身巾は中央で二・五cm、棟の厚さ〇・七cmであった。刀身は前に書いたごとく、峰の先端から五cmのところで折れている。（写真8、参照）

c. 鉄鎌一八本

鉄鎌は遺骨の腰のあたりから西の方で見だされたが、一塊りに纏着しているものもあり、數は正確でない。鍔形や刀身形のものが多く、柄部が長くて細いのが特徴である。

写真4 石棺内部の状態



写真5 石棺の構造



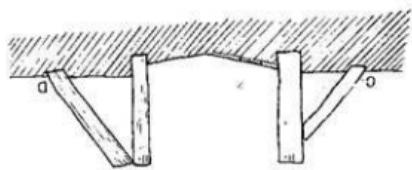
写真6 棺底の散石



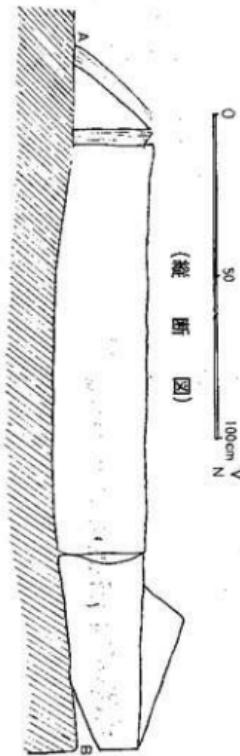
写真7 刀の在った位置



圖版2 延岡市稻葉崎南式石棺墓測圖
(平 圖)



(横 断 図)



(縱 斷 図)

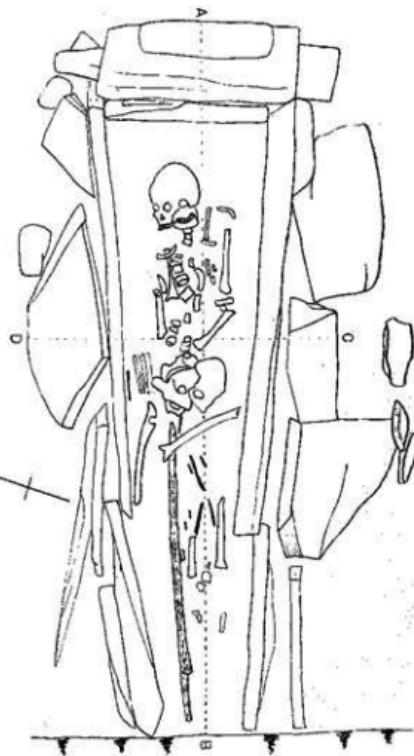


写真8 直 刀

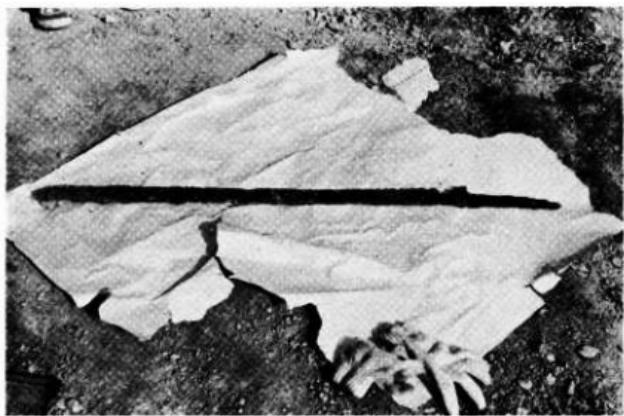
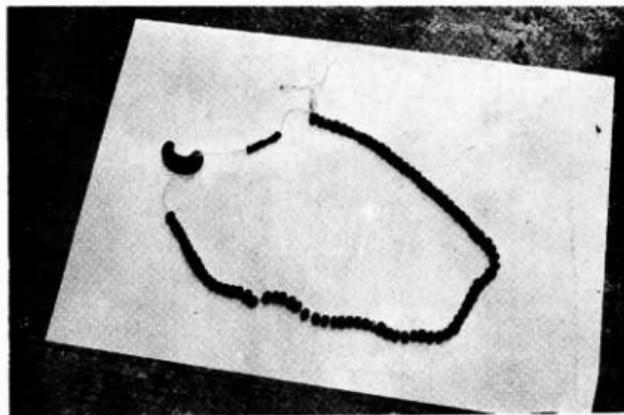


写真9 玉 頬



玉類は人骨の頭部、頭蓋骨の下から胸のあたりにかけて存在した。玉一個、丸玉八個、小玉八個の合計九三個であった。写真9、はそれを示す。勾玉は出雲石のようである。丸玉の中には田玉に属するものもあるが、大きさがほぼ同じなので一括した。小玉はその小形のものである。

三、古墳の年代

千枚岩を用いる箱式石棺は、弥生式時代から在るものであるが、琴馬周辺のものには時代の降るものもある。延岡市内の箱式石棺は、北は熊之江町から、東海地区の友内山、無鹿、琴塚、岡倉地区の岡倉町、坊内山、恒富地区の下平原など広い分布をもっているが、熊之江町のものには弥生式土器が入っていたし、琴塚のものは、棺外ではあったが須恵器の錐瓶があった。それで、この地方では相当永く使用されたことが知られるが、大体言つて延岡市地方の箱式石棺では、棺の両端に副室を設け、棺身の底部には石を敷かないものが古式のようである。従つてこの古墳は、箱式石棺ではあっても、かなり時代の降るものと見るべきで、古墳時代中期のものと思われる。なお人骨については人類学の専門家の鑑定を求めるたいと思う。

えびの町平松の地下式古墳調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

西諸県郡えびの町真幸地区の大字島の内字平松は京町の東北二・五キロばかりのところにある台地で、この台地の東部は字杉ノ原（須木ノ原）に属している。そしてこの台地を南から北に高压電線が縱走している。写真1はその状景を示す。遠方に見える山は熊本県人吉市に越える峠である。

この台地上には古墳が多く、字杉ノ原に五基、字平松に七基の地下式古墳と一基の円墳が指定され真幸古墳と呼ばれているが、古くはさらに多くの円墳があったのを耕作のため削平したと地元の人は語っている。写真2はただ一基残っている円墳である。

これらの地下式古墳からは優秀な副葬品が出土し、東京国立博物館では字杉ノ原出土の「衝角付兜」、短甲一、刀剣身残片七、鐵鎌二、石斧一を保存しているが、衝角付兜は特に優品である。また、昭和十年六月に高压電線の鉄柱を建てたとき、その下に地下式古墳があり剣、馬具、鉄鎌などが掘り出された。その位置は写真1に見えていた鉄柱の下である。また昭和四十一年に県立博物館学芸員であった栗原文蔵氏が調査した地下式古墳は、それから一〇mぐらい西方の畑である。

昭和四十三年の二月には有名な「えびの地震」があったが、この地

写真1 平松台地の概観



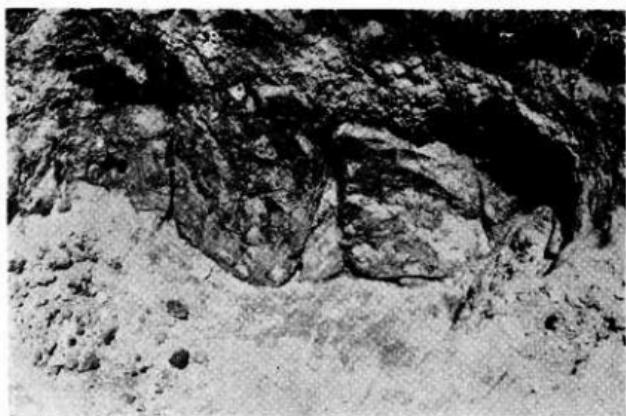
写真2 古地にある円墳



写真3 天井が落ちて穴のあいた状態



写真4 羨道を閉塞している粘土



震で地下式古墳の天井部が破壊され二ヶ所に古墳が発見された。
それで同町教育委員会の連絡により、同年五月十五日、県社会教育課
の加藤主事とともに同町に出張して調査した。

二、調査の結果

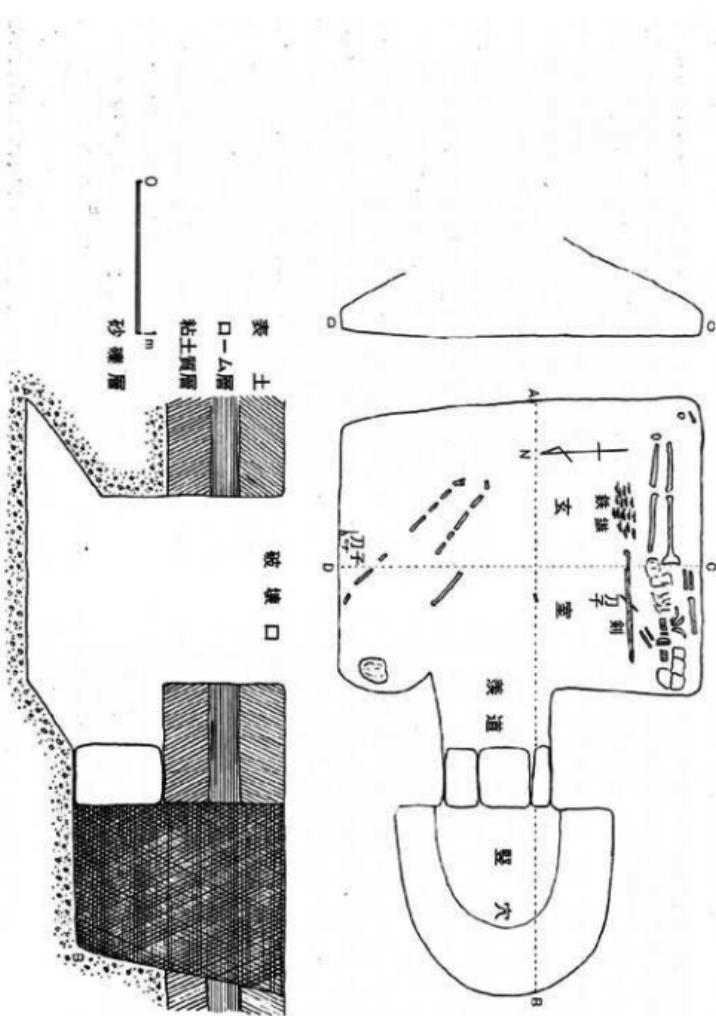
現場は燕麦の畑で、写真1に示した高圧電線の電柱から 100m ばかり南方に天井部が落ち込んでいるところがあり、人骨が見えていたので、差当りこれを昭和四十三年度地下式第一号と仮称することとした。また前記電柱の約 10m 西方の栗原氏調査の地下式古墳の西南約 5m のところに一つ穴があいており、これも人骨が見えていたので、これを昭和四十三年度地下式第二号と仮称することとした。

1、第一号墳

これは、前に記したことく、燕麦畑にあったもので、写真3は穴のあいている状況を示すものである。この地方は厚さ 30cm ぐらいの表土の下に赤褐色のローム質土層が 20cm 内外の厚さで入っており、その下に 20cm の厚さの粘土質土質があり、さらにその下に相当に厚い砂礫層があるが、古墳はこの砂礫層に埋れていた。その状況は図版1に示す通りである。

古墳はほとんど東西に正しく方位し、玄室を東、羨穴を西にして造られていた。堅穴は半円形をなし、弦部を東に弧部を西にし入口の大さは弦部の長さ一・四〇m、弧部の径一・二五mで、底部に行くほど縮まって、底部は弦部の長さ八〇cm、弧部の径八〇cmとなっていた。羨道は弦部のほぼ中央、入口の南端から北に四〇cm、北端から南に二

図版1 えびの町真幸平松45年第1号地下式片堀式遺跡



○mの間に開口し、入口の中七二cm、高さ六〇cm、長さ八〇cmであるが、底部は入口から四〇cmのところから玄室の人口まで傾斜しており、傾斜の高さは約三〇cmであった。そして羨道の入口は大きく四角に切った粘土で閉塞し、その間隙を小さい粘土で塞いだ。

写真4は豊穴から羨道の窓が開けている状態を見たものである。

玄室は羨道の東方に、一段低くなつておらず、ほぼ丸の長方形であるが、玄室の北部がかなり壘んだ形となつていた。玄室は南北に長く、長さ一・三〇m、東西は中央で一・八八mであるが、北壁は長さ一・五六m、南壁は約二m東壁は一・二〇m、西壁は南壁の西端から九〇cm、北壁の西端から五〇cmの間に羨道が開口しているが、羨道から北側の西壁は外側に弧状に張り出していた。玄室の床面には何らの施設もなかつたが、砂礫層に掘り込まれているので、礫を敷いたように見えた。天井部の中央が破壊されていたので、天井の形は不明であったが、南側においては壁から九〇cm北方で高さ六六cm、北側では壁から四〇cm南方で高さ四〇cm、東側でも壁から六〇cmの西方で高さ四八cmであった。從つて天井は甚だ低かったことが知られる。

遺物は玄室の南壁に接して壁に平行に西を頭にして人骨一体が腰伸ばされ、さらに北西隅に頭を置き体を東側に伸ばして葬られていた人骨一体があつた。また南側の人骨の北側に剣一口が鋒を西に柄を東にして、人骨に併行して置かれていたが、この剣のやや中央に交叉してその下に刀子一口があり、剣の東側に鉄鎌一八本が一團となつてあつた。さらに北壁のはば中央、東壁から五六cmのところに刀子一口が柄を北に、刃を立てて壁に南角に置かれていた。写真5は剣と鉄鎌との

位置を示す。副葬品は写真5に示すものがそれである。これらの遺物を記述すれば次の通りである。

1 人骨 二体

一體は南壁に接して葬られており、頭蓋骨は數片に割れていたが、全体に骨格がよく保存されていた。骨の道存する長さは約一・六〇mである。大体その位の身長の人であったと見て大過はないであろう。しかも玄室の中央に葬らず、玄室のもつとも南側に片寄せて葬っていることは、浮米の死亡者を葬る場合のために空地が設けられたものと思われる。他の一體は北西の隅から斜めに足を伸ばして葬られていた。頭蓋骨は崩上が落ちかかって埋まっていたため所在がわからず、発掘の際踏まれて壊れていだが、場所は動いていなかつた。

これも骨の道存する長さは一・六〇mであった。ここに注目すべきは、頭蓋骨のある西側の壁が強引に切り抜げられていたことと、この人骨が斜めに葬られていた事実である。北壁は長さ一・五六mであったから、ここに第一の人骨のよう、壁に接して壁と平行して葬るには壁の長さが足りない。そこで頭の方の頭を外側に掘り抜げたわけであろう。しかもなお足が門そうで崩屈であったから、斜めに葬つたものと考えられる。それにしても、中央部か、第一の人骨の横に葬れば、充分に葬り得たはずと思われるのに、この屍体を第一の人骨と最も遠い反対側に葬つたことは、やはり将来の死亡者を葬る場合を考慮して中央部を明けて置いたものと思われる。このことは、この時代の地下式古墳が、家族葬の性格をもつていたことを示すものである。

写真5 支室内に剣（上右）と鉄鎧（上右）のある状態

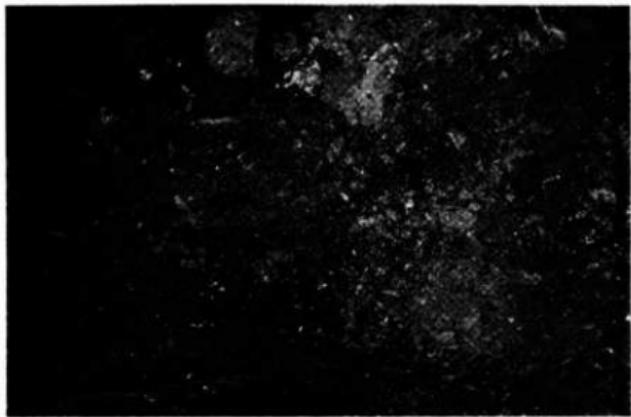


写真6 支室内の遺物

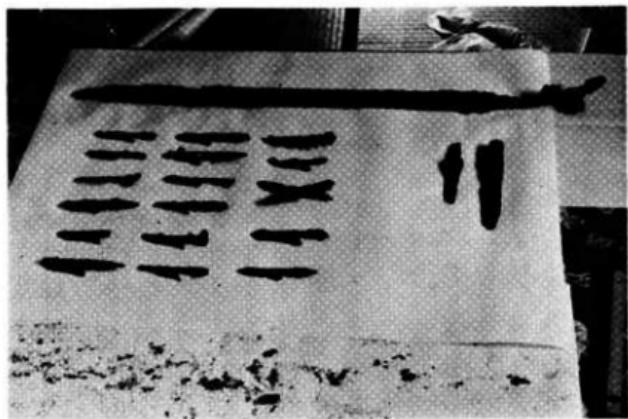
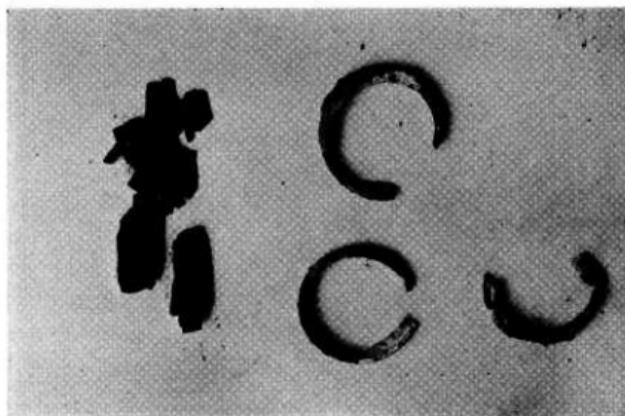


写真7 第2号墳外の遺物



2 刀 一口

これは南側の人骨の北側に、人骨を守るかのようにこれに平行してしかも鉾を西に向けて置かれていた。總長七九cm、柄の長さ一五・五cm、茎の中一・五cm、厚さ〇・五cm、身は長さ六三・五cm、身巾中央で三・三cm、厚さは〇・六cmである。

3 刀子 二口

一口は右の劍に交叉してあったが、長さ一一・三cm、うち身の長さ六・五cm、身巾一cm、柄の長さ四・八cm、茎の中〇・八cmという小さいものであるが、柄の鈎元に鹿角装が施されている。

他の一口は長さ一五・五cmで、身の長さ一〇・七cm、柄部は四・八cm、身巾一・五cm、厚さ〇・三cm、柄部は円筒状の直徑一・八cm、〇cmの柄が残り、折れている中央に茎の先端が見えている。そして明らかでないが、やはり鈎元に鹿角装があるらしい。図版2は刀子の実測図である。

4 鉄鏡 一八本

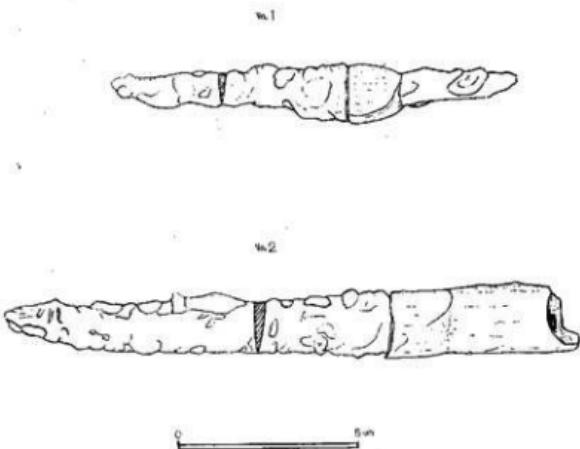
写真6に見えるごとく、ほとんどみな片刃の刀身形のものである。

2 第二号墳

これは第一号墳の北方約一〇〇mのところにあり、前に述べたごく、昭和十年に発見された鉄柱下の古墳、栗原氏調査の古墳と相接近しているところから、この附近には多数の地下式古墳が群在することが知られる。

しかし残念なことに、この古墳はすでに荒されていた。漢道と堅穴が破壊され、堅穴の上を塞いでいた蓋石をもって堅穴の一部を補強し

図版2 えびの町平松地下式43年1号墳出切る



この古墳も玄室などは砂礫層に掘り込まれていたことは第一号墳と同じであったが、古墳は東南より西北に方位し、玄室を西北に、堅穴を東南にして作られていた。堅穴と通道は原形を留めていなかったが、玄室の入口における通道の巾は七〇cmであった。玄室はこれと直角に、東北に、東北より西南に向って造られ、この方向に長い精円形で、長径一・八〇m、短径一・四〇mぐらいであった。天井は平たく床面よりの高さ七五cmで、小さい古墳であったが、玄室には人骨一具が東北を頭に、西南を足にして仰臥葬され、人骨は可なり良く残っていたが、もちろん相当に原位より動いていた。遺物はすでに持ち去られたらしく何物も見いだすことはできなかつたが、上にあつた貝輪と刀剣の残欠と見られる鉄片がこの古墳にあつたものと考えられた。

1 貝輪

写真7で見られるごとく、三個分か、あるいは他に欠損があつて四個分かも知れないが三個分か、それ以上と思われる。イモガイを輪切りにしたもので、この種の貝輪は国富町市ノ瀬地下式第一号墳から発見されている。

2 鉄片

刀剣類の破片であるが、余りに小さく割れているので明らかでない。

三、古墳の特徴と年代

ここに記した第一号墳は、その形式が極めて特徴ある古墳で、堅穴が半円形をなしていた。宮崎県下の地下式古墳は、現在までに知られているところでは、このように堅穴が半円形をなしているものは、ほかに見いだされていない。しかし鹿児島県下の地下式古墳には、このようなものが多い。えびの町は鹿児島県に接しているので、双方の文化が混在することは当然であるが、地下式古墳に関する限りは、宮崎側に古式のものが多いので、このえびの町地方で新らしい形式が分化し、それが鹿児島県下に伝えられたのではないかと考えられる。

またこの古墳は、前に述べたごとく、家族墓という地下式古墳の性格をもつとも端的に示している古墳としても興味深い特徴を示しているが、それらの特徴は古墳後期のものであることを証拠づけるものであり、この古墳は古墳時代後期（六世紀ごろ）のものと見るべきであろう。

高崎町塚原地下式古墳調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

北諸県郡高崎町大字繩瀬字坂原は字名のごとく、古墳の多いところで、同町古墳第一号の前方後円墳をはじめ多数の円墳が指定されている。しかし最近、水資源に恵まれている同町では、畠地の開田事業が盛んとなり、遂にこの古墳地帯の畠地も開田化されるに至った。写真1は、このような畠地の水田化に伴なつて指定古墳（櫛木が建つ）を残して、畠地が水田化されている状況を示すものであるが、この場合少しでも耕地を広くしようとする耕作者のために、円墳は四方を削られて方墳化する傾向があるということであった。

このような開田事業によって畠地を切り下されたため地下式古墳が発見され、二基の古墳が発見されたという同町教委の連絡により、昭和四十三年五月十六日、農社会教育課の加藤主事とともに「えびの町」から高崎町に向い、同町教育委員会の協力を得て現地を発掘調査した。

二、発掘の経過

現場は塚原の同町第一五号円墳の北方約10mのところで、写真2に見られるごとく、この畠地を一・五〇mばかり切り下したところが、黄褐色のボラ層を切っている場所（人物の左方）があり、これが

地下式古墳の堅穴と知られたのである。今一つはこの畠の西南の道を越えた畠であったが、すでに埋められていたので、探したが見つかなかった。それでこの古墳を塚原地下式第一号と呼ぶことにした。この古墳も、すでに水田化のため水が入れられかけていたが、調査のため水を入れることを延期させていたのであった。

なお写真2に見えるように、古墳の堅穴の左にボラ層の上まで掘つた堅穴住居跡らしいものがあつたが、時間の都合で調査することができなかつた。写真3はこれを大きくしたもので、試掘の結果、直徑五m、長さ一〇mぐらいの木炭を採集した。

ここ地層は三〇~四〇cmの表土の下に厚さ10cm内外の火山灰層があり、その下に厚さ20cm内外の「黒ソミ」と呼ばれる黒色の土層があり、その下には「赤ボラ」と呼ばれる赤褐色の土層が厚く2mぐらゐ入つており、その下は褐色の粘土層となつてゐる。しかし古墳のある場所は、多少他の場所と地層の関係が違つてゐる。これは写真2によつて明らかで、牛の背中から頭の上の前方切取前に見えてゐる薄い火山灰層は、右に伸びて堅穴住居跡によつて切られてゐるが、古墳の堅穴の上には右上りとなつて若干残つてゐる。さらに写真の右端から左上りとなつて伸びてゐる。これによつてこの地層は、もと人間の立つてゐる附近を頂上として隆起してゐることが知られる。

写真1 古墳地帯の開田風景

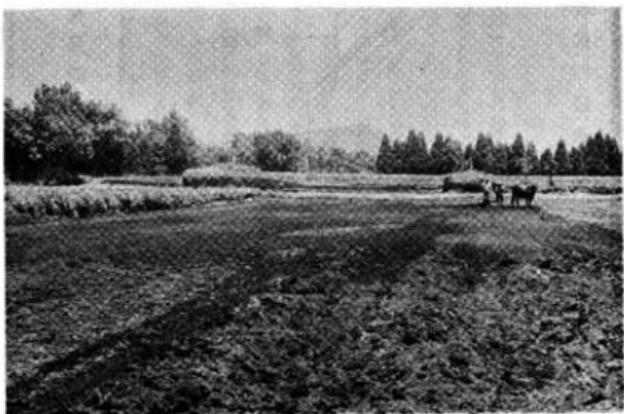


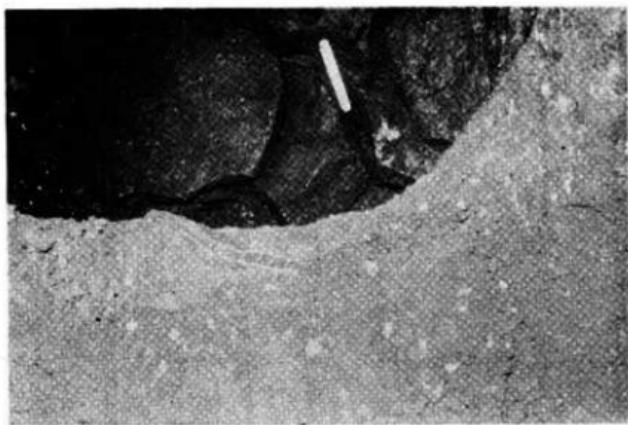
写真2 型穴の見えている状態（人物の左の白い筋が切れている所）



写真3 穴穴住居らしい所（その右側が古墳の墓穴）



写真4 池道を石で閉塞している状態



従つてこの古墳は黒ソミ土の下部から掘り込まれてお、上に残る火山灰層が堆積したときは、すでに造られていたことは明らかである。

その点、左側の堅穴住居らしいものは、火山灰を切つてあるから、この灰の堆積以後のものと認められる。この点はこの古墳の年代決定に大きな関係がある。

この古墳は赤ボラ層を通過してその下の粘土層に差道と玄室を掘り込んでおり、堅穴が甚だ長い。古墳はほぼ東西に方位し、堅穴を東に、玄室を西にして造られているが、正しくは古墳の輪線（AB）は図版1に見ることく、東西より約二〇度南に傾いていた。堅穴は黒ソミ土の下部から赤ボラ層を貫いて、その下の粘土層に達し、底面は地表から三・六〇mあり、堅穴の深さは二・九〇mである。堅穴の底面は南北に長い角丸の長方形で、南北の長さ一・六五m、東西の中一mで、上方に行くに従つて広まっているが、上方（入口）は上の畠が落ちるので計ることができなかつた。堅穴の底部の西壁には扁平な大小の自然石二十四枚をもつて差道の入口を閉塞していた。しかし、この堅穴は大きく深い上に、ボラ土と黒ソミおよび粘土が混つてゐるので、甚だ堅く、これを掘り出す作業は困難を極めた。幸いにして午後より同町青年学級の生徒十名の参加協力を得たので漸く差道に掘り当てることができたのであつた。写真4は差道の開塞状況を示すものである。この日はすでに午後六時に近かつたので作業を中止して宿舎に引き揚げた。

そして翌十七日は早朝から現場に行き、神官による修祓式を行ない、差道の閉塞石を順次に取り去つたが、差道は壁穴の西堅の南端か

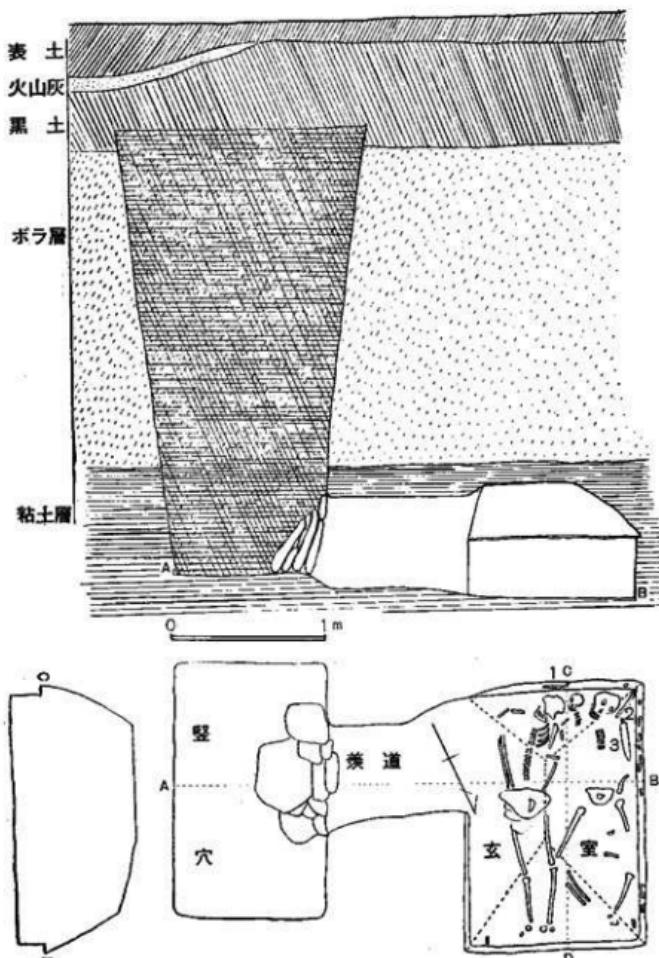
ら四〇cm、北端から六〇cmのところに開口し巾六五cm、高さ六〇cm、

長さ九〇cmあり、しかしその形は甚だ歪んでいた。そして差道の床面は、堅穴よりは一〇cmぐらい低くなつた。玄室は差道の西に、これと直角になつており南北に長い矩形をなしていたが差道の南には殆んど出す北側に一方的に伸びていた。南北の長さ一・六〇m、東西の巾一・一〇m、天井は四注造りの屋根形をなし、中央に南北に長さ五〇cmの棟があり、それから四方に屋根が降つていて、それが四方の壁と床面から二〇cmのところで出会つて、そこに五と二〇cmの厚さの棚を形成していた。そして天井の高さは八〇と七〇cmで奥の方が高かつた。それにしても玄室は極めて狭いものであつた。

玄室の床面は奥に行くほど若干低くなつていて、床には何らの施設もなかつた。そして玄室一杯に人骨三体が頭蓋骨を由にして伸展葬されていた。写真5、6はその状態を示す。従つて狭く天井の低い玄室に人骨が一杯あるので、足の踏み場もなく、腰を伸ばすこともできない上に暗いので、差道部から照らす櫛中電燈の光で計測し、さらに自分の懐中電燈で画板の上を照らしつつ実測図を作らねばならなかつたが、この由を聞いて馳けつけた村人たちによつて堅穴の入口を塞がれたので、炭酸ガスの濃度によって息苦しくなり、その度に玄室外に出て呼吸してまた入るという状態で調査は困難を極めた。

また副葬品は南側壁の棚の上に鏡（やりがんな）が載せてあつた。写真7はその状態を示すものである。また西南の隅に一番奥の頭蓋骨の西側に一口の劍が柄を上にして斜めに立てかけてあつたが、これは棚の上にあつたものがずり落ちたのであろう。写真7の右

圖版 1 高崎ヶ大字開瀬字冢原地下式第1号古墳実測図



1. 鑓 2. 剑 3. 刀

写真5 玄室内の三体の人骨（中央は子供）（右の頭蓋骨の右とその下に剣が見える）



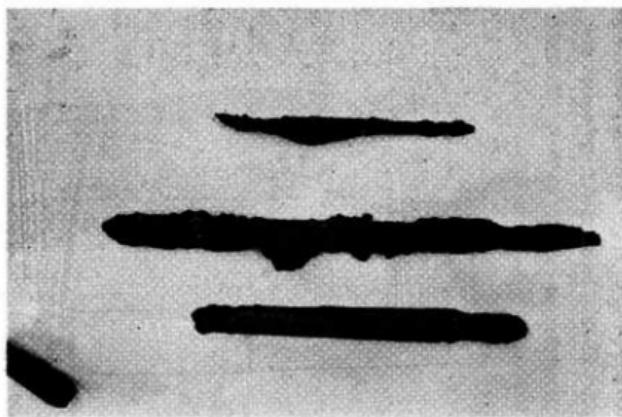
写真6 同上 横から見たもの



写真7 銚の上に鉈の載せてある状態（奥に劍が斜に立っている）



写真8 鉈と 剣



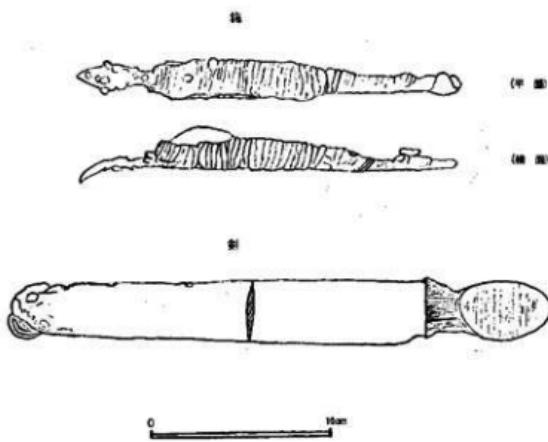
上に見えるもの、写真5の右上に見えるものがそれである。また一番奥の人骨の肩の附近にさらに一口の剣があり、これには鉄鎌が一本銛び着いていた。写真5の右端中央部に剣の一部が見えている。かくて午後五時前に調査を終って汽車に乗り、都城を経て帰ったのは十時頃であった。

1 人骨 三体

三体とも頭を南に足を北にして葬られていたが両脇の二人の骨は成年で、中央は小さく子供の骨であった。一番奥の人骨はやや乱れていたが成年男子のものと見られた。そして頭蓋骨には朱が塗られていて、明らかに洗骨を行なわれたことを示していた。中央の頭蓋骨は相当に小さく、それが子供の骨であることを示していたが、義道に最も若い人骨は、最も良く保存されており、成人女子の骨と思われた。この子供の頭蓋骨と、成年女子と見られた頭蓋骨には朱は塗られていなかった。これによつて、この三体の人骨は夫婦とその子供のものであることが推測された。また最もよく保存されていた左側の人骨の遺存した範囲は一・五五mmであった。一番奥の人骨の遺存した範囲もだいたい同様であったが、この人骨は大腿骨を外に脛骨を内にして足を曲げた形で残っていたことは、長さ一・六〇mmの玄室から見て、足を伸ばしては葬られない状況にあったものと思われ、この人が身長も高く、男性であったことを推測させるもので、骨盤の大きさから見てもこれは動かないものと思われる。なお櫛の諸所に小さい骨片が多く載せてあったことが注意をひいた。

2 剣 二口

図版2 高崎ケ原原地下式第1号墳出土器と剣



一口は西南隅に立てかけられていたもので柄を上にし、鋒を床面にしづばしては葬られない状況にあったものと思われ、この人が身長も高く、男性であったことを推測させるもので、骨盤の大きさから見てもこれは動かないものと思われる。なお櫛の諸所に小さい骨片が多く載せてあったことが注意をひいた。

在ったものがずり落ちたうしく、斜めに立てかけた形で、鋒のみが床面についていたので、ここだけが腐鏽しているのみで刃は手が切れるばかり鋭利であるが、柄も身も、このようによく保存されていて、柄部に木質がよく残っているのに、刃に木質が少しも遺存していないのは、始めから拔身で剝離されたことを示すものである。それにしても良く保存されている剣であり、学術上貴重な資料である。図版2および写真8の下参照。

次の剣は第一のものの下、人骨の肩のあたりに西壁に平行して柄部を南北に鋒を北にして置かれていたもので、長さ四二・五cm、うち身の長さ三二cm、身巾三cm、柄部は長さ一〇・五cmで彫化しており二つに折損している。鋒の部分に鐵錐が一本接着している。写真8の中央がこの剣である。

3 錐一本

南壁の棚の上にあったもので長さ二一・二cm、刃部の長さ三・五cm、巾一・二cmで刃は上に反っている。柄部は木質の上を紐状のもので四角に巻き、巾二cm、厚さ一・八cmぐらいあつたものと思われる。写真8の上段と図版2の上二段がそれを示す。錐は彫刻の用具であるが、從来の出土品は殆んど鉄の部分だけであるけれども、この品は柄部の構造を良く残しており、錐の使用法や、用具としての形を知るための貴重な資料で全く珍品というべきものである。

前記の剣に錐着しているもので、長さ一二cmで柳葉形のものであ

る。錐着していく取り離すことができない。

三、古墳の特徴と年代

この古墳は玄室が四角形で、四注過りの家形をなし、また壁に烟突の施設があり、また羨道の入口を扁平な自然石を鰐状に重ねて開塞していたが、これらの特徴は、地下式古墳では比較的古式のものである。しかし地下式古墳自体が古墳時代中期から始まるものと見られるので、出土遺物などから見て、古墳時代後期の初頭ごろ（千四百年位以前）のものと思われる。

なおこの古墳は、三人の屍体を葬っており入口の人骨が最も良く保存されていることは、この屍体が最後に葬られたことを示唆しているが、この三人が両親と子との屍体であることが推察され、家族墓としてのこの種古墳の性格を最も良く示している。また三体のうち男性の成人、この場合家長と見られる人の頭蓋骨だけが朱が塗つており、洗骨の風習を現わしているのも興味深いことで、当時の風習として家長の頭蓋骨だけに朱を塗つたものか、どうか、今後の資料として貴重な古墳である。またこれが、小形盛土墳のある地帯に混在することも注目すべきことで、附近にある小円墳もあるいは地下式古墳の盛土ではなろうかという気がするのである。

さらにこの古墳の場合は、前に記した薄い火山灰層の下にあることを注意せねばならない。これは霧島山の噴火によるものであろうが、霧島山の噴火は奈良時代以来たびたびの記録があるが、もちろんこれ

延岡市古川町剝抜石棺の遺物

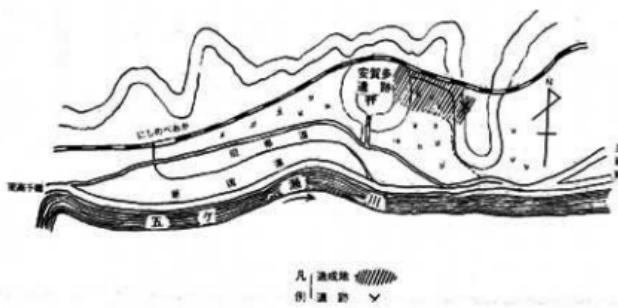
石川恒太郎

一、発見の動機

昭和四十三年五月一日延岡市古川町字伊勢ノ前三六五番地、甲斐宗蔵方の裏山をブルトーラーで宅地に造成中、剝抜石棺が発見され作業員より市教育委員会に電話で報告してきたので同市社会教育課の文化財担当甲斐常美主事が現場に急行したが、剝抜石棺は四個に割られ、出土遺物は地主の甲斐宗蔵宅に保管されていた。それで甲斐主事は地主および事業主に文化財の取扱について指導し、遺物は全部採集して引きあげ、この旨を県教育委員会に報告して査定を求めた。それで同年二月二十一日社会教育課の命を受け延岡市に出張、甲斐主事の案内で現地を見たが、小嶋政一郎氏も同行された。

現場は見取図に示したごとく、安賀多神社の東方で、安賀多神社は安賀多遺跡として県で指定されている所であるが、その丘地の東側斜面を削って二段の宅地となし、その土と水田を距てて東方なる前記甲斐宗蔵の裏山を削って中の水田を埋め、宅地を造成中で、石棺があつたのは写真1に示す場所であったという。ここは小高い丘地の頂上部に当り、地形上円墳があつたものと思われる。この附近は、東方の坊内山から岡富町にかけて、このような丘地の頂上に古墳がある地帯であるから、ここもそうであったと思われる。しかるに、石棺はすでに埋立地に埋めたということで、遂に見ることができなかつた。

延岡市古川町遺跡附近見取図



しかし幸いにして甲斐主事が撮影した写真があり、それによれば、同市内に多い凝灰岩を割り抜いて造った削抜石棺で、蓋と身とが二つずつ、四つに割れていたものであろう。内面は丸の長方形に削り抜かれており、内部全面に朱が塗られていたという。前後に綱掛突起が見えているが、恐らく中央部にも突起があつたものと思われる。

それにしても、このような見事な削抜石棺は、宮崎県では延岡市に最も多く、市内では南方地区が最も多く、下舞野から今井野、吉野、天下、西附、野田附近に及んでいる。その他では恒富地区の小野、平原にあり、岡富地区で発見されたのは、これが最初である。また県の中部においては新富町新田原の石船塚（発掘移転）高鍋町持田の石船塚などが知られている。

二、遺 物

石棺内にあった遺物は、中央公民館に保管されていたが、刀一口、

刀柄部一、劍一口、短甲残欠、鉄鎌三三本であった。

1、刀 一 口

柄部を欠損しており身の長さ六一・九厘、身巾二・七厘、棟の厚さ

〇・六厘である。

2、刀 柄 部 一

記載刀の柄部であるかどうか不明である。長さ一八厘、茎巾二・五

厘で目釘の孔が見える。

3、劍 一 口

柄の一部を欠損しているが、現存の總長六六厘、身の長さ六一・五

写真1 石棺のあった場所（矢印の所）

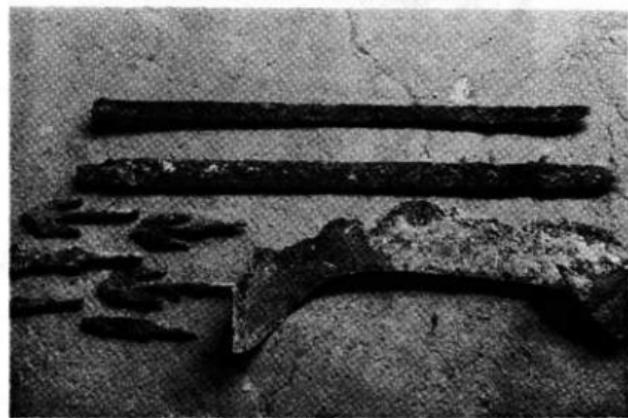


写真2 掘り出された石棺（甲斐主事撮影）



写真3 石棺内遺物の主なもの（甲斐主事撮影）

（上より刀、剣、下右短甲、下右鉄鎌）



四、柄部四・五cmで身巾は三・五cmである。

4、短甲残欠

これは短甲の後嗣の上部「押付」に当る鉄板のようである。左右下に曲っている尖端の距離は四六cmある。鉄板の上縁と下縁に孔が並んでおり、上縁には革の環輪が施こされていたらし。下縁の孔も紙留ではなく、革綴の穴と思われる。

5、鉄鎌三三本

平根式のものと尖根式のものとが混合している。柳葉形のものが最も多く、鉢形のものも若干ある。しかし注目すべきは写真3に見えている上二段の大形の四木で、このうち一本は鉢形で長さ一九cm、最広部の中四cmでもっとも長い。他の三本はいずれも逆刺のついた腹抜式であるが、逆刺が上方にもう一つ付いている。最大のものが長さ一八cm、最広部の巾四・三cm、次が長さ一五cm、最広部の巾四・三cm、最短のものも長さ一四・五cm、巾四・三cmであるが、このような形式の鉄鎌は初めての出土であろう。

三、古墳の年代その他

この古墳は円墳であったものと思われるが、このように巨大な石棺をり抜いているものは、大きな古墳が多い。これを石棺の発展段階から見れば、箱式の千枚岩の石棺から、切石の石棺となり、それが水分の浸入を防ぐため蓋を切り抜き、さらに蓋も身も切り抜く削抜石棺となるわけで、石棺としては最も発達した形式のものである。宮崎県でも削抜石棺を有する新田の石船塚や、持田の石船塚が何れも前方後円

墳であることを見るならば、この古墳が古墳時代の最盛期のものであることを知ることができる。

また遺物に就いて見ても、刀や剣が相当に長く、短甲は紙留式でなく、古式の革綴式であること、鉄鎌が大形であることなどから見て、この古墳は古墳時代中期ごろ（五世紀ごろ）のものと見ることが妥当であろうと思う。

この石棺には人骨も遺存していたらしいのであるが、前述の事情で明らかでない。ただ甲斐主事の報告には「特に人骨の腰附近に鉄製の鎌の一端とも思われる鉄片が出ています」と記されている。従って人骨の状況は明らかでないが、前に述べたような刀、剣を副葬し、鉄鎌三三本を副葬していることから、この石棺に葬られていた人は、鉄鎌の巨大で、一段の逆刺をもつていてことなどから、体力雄健な武人で、いさかか懾愒な性格を感じさせるものがある。

高千穂町吾平原横穴古墳調査報告

石川恒太郎

一、所在と発見の動機

西口杵郡高千穂町大字三田井字吾平原は三田井の町役場より東北に約一・五キロのところにあり、浅ヶ部部落の南方、後川内部落の東方あり、横穴古墳の群集しているところで、すでに横穴古墳二基が県指定となっている。しかしに昨年この台地上に興立の職業訓練所が建設され、この工事のため九基の横穴古墳が破壊され問題となつた。その後今年（四十三年）に、この職業訓練所の南方に続く台地上に興立住宅が建設され、この住宅への登り口を造ったところが、その左側斜面に横穴古墳が一基発見された。これが町教委より県教委に報告されたが雨季であったので、雨の止むのを待つて七月二十三日県教委社会教育課の加藤主事とともに同地に出張、同日と翌二十四日に貢り調査を行なつた。

二、調査の概要

この地方は阿蘇火山の影響を受けることが多かつたところで、厚さ五〇cm内外の成層土の下は厚い火山灰の層で蔽われており、横穴はこの火山灰層を掘って貫まれている。この横穴も同様で火山灰層に設けられている。

横穴はほぼ東西に方位し、その中軸線（AB）は東西の方向より約

一六度北に傾いている。羨道は東にあり、長さ約六〇cmで入口の巾約五〇cm、玄室の入口の巾約六三cmで、奥に行くほど広くなっている。

高さは入口で四八cm、中央で五三cmで、これも奥が高いが天井はアーチ形をなしていた。そして羨道の口は、一株の墓石で閉ざされていたらしく、下に墓石があったが、これは長さ九〇cm、巾六七cm、厚さ八cmの安山岩で、圓版はそれで閉じた状況を示したのである。

玄室はやや不規則であるが、圓版に示すことく、長さ一・三五m、巾二・三〇mで羨道は東壁の南端から北に九五cm、同北端から南に八〇cmの間に開いている。しかし東壁は羨道の接点から南北に何れも西に傾いている。南壁は長さ一・三五mで、方向はほぼ東西であるが、中軸線に対し西端で二・三cm接近日し、且つ中央がやや彫れている。西壁は長さ一・二五mで方向はほとんど西南より東北に向いている。従つて玄室の北壁は南壁より狭まっている。即ち北壁は長さ約一・九五mで、南壁より四〇cmも短かい。しかもその西端は屍床の切り込みがあつて非常に不規則となつていて、玄室の天井は平らで、高さは中央部が最も高く、一・四〇mである。面白いのは玄室の床面であつて、床に四個の屍床が設けられている。これらの屍床は、屍体を安置する場所であつて、床面を一〇cmぐらい掘り深めているが、その一端にそれ頭を入れる部分が設けられているのがその特長である。

a、床は南壁に接して壁の長さ一杯に造られた頭を入れる部分を東にして造られている。頭を入れる部分は長さ二五〇cm、巾二三〇cmで頭の頂は円くなつて一部頭部は東壁に刺り込まれている。肩の部分の巾六八〇cm、肩の所はやや円味を持つている。西端の巾五〇cmで、この先墳部は巾約二〇cmが高くなっている。

b、床はその北側に二五〇cm内外の間隔を置いてほぼ平行に造られている總長一・五八m、巾六八〇cmで、両端が円く、東端に頭を置く施設がある。これは巾二三〇cm、長さ一二〇cmぐらいである。なお、これは炎道の延長上にあるのである。

c、床はその北に約一〇〇cmの間隔を置いて、北壁に接して造られている。總長一・五五m、巾六八〇cmで中央がやや張った角丸方形をなし、東端に頭を置く部分があり、その長さは一五〇cm、巾二二〇cmである。これも頭部は丸く東壁に切り込まれている。

d、床はb、c、兩床の西方に約二〇〇cmの間隔を置いて西壁に接して頭部を南北に方位して造られている。總長一・七〇m、巾は肩部で六〇cm、北部で三五〇cmで、肩部の広い梢円形をなし、頭部は巾三〇cm、長さ二〇〇cmで、頭頂部はa、床の一〇〇cm北に当つている。

以上のように、この横穴は玄室の南、北、西の各壁と中央玄室の延長とに、四個の屍床を設け、各床に遺体を葬つたわけで、狭い玄室を最も効率的に利用していることが知られる。この場合、南、西、北、中央という順序に葬ることが最も合理的であると思われる。

なお床面には厚さ七〇cmの粘土が敷かれていた。それでわれわれが調査した時は、この屍床には水が溜っていたが、下に粘土があるので、

穴が狭く、天井は低く、入口は狭いので暗い上に暑さと悪くなるしさに加えて床はドロドロの粘土とあって、全く調査は不可能に近い状態であった。

三、遺物

この古墳は、すでに発見されたとき、附近の子供が中に入って刀、剣、鐵鍔などを掘り出していた。これらは町教委に置いてあつたが、何所にあつたかは不明で、b、c、床などが掘られていたから、それらから出たものであろう。われわれはa、床の西部からやや東に亘る屍床面で塊をなしている鐵鍔を見出した。しかし既に荒されていたのと、泥水や粘土のため細かい物は見出すことができなかつた。前に掘り出されたもの、およびわれわれが発掘した遺物は剣一口、刀三口、刀子二口、鐵鍔約三八本であつた。

■、剣 一 口

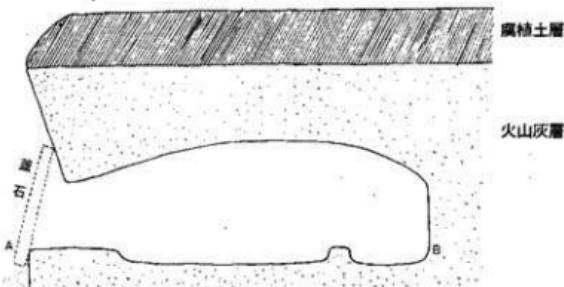
總長四八〇cm、うち柄長一一・五cm、身長三六・五cm、茎巾一・五cm、身巾三cmである。

■、刀 三 口

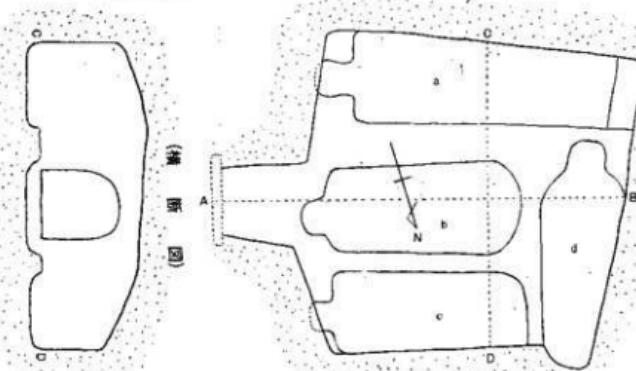
一口は總長五〇〇cmであるが身が折れ曲っている。柄長八cm、巾二cmで、身は長さ四二cm、身巾一・五cm、棟の厚さ〇・七cmである。一口は長さ二四〇cmで、柄部は折れていて現長三cm、巾一・五cmである。身の長さ一一〇cm、身巾一・七cm、棟厚さ〇・六cmで小刀である。他の一口も小さく長さ一二〇cm、うち柄長六・五cm、身巾一・二cm、身は長さ一五・五cm、身巾一・七cm、棟の厚さ〇・五cmである。

高千穂町呂平厚横穴古墳実測図

(縦断面)



(平面図)



●、刀子 二 口

一口は長さ一六・五cm、うち柄長四・九cm、身長一・七cm、身巾一・六cm、根の厚さ〇・四cmで、他は長さ一四・五cm、折損しており、柄長三cm、身巾一・七cm、根厚〇・五cmである。

d、鉄鏃 約三八本

多くは鏃着して塊状をなしている。平根式の鉄形のもの、逆刺のあるものや尖根式の柳葉形のもの、刀身形のものなどが混っている。

中に刀身形で長さ一・三cm、身長八・五cm、身巾二cm、根の厚さ〇・

二cm、柄部は先端が折損しているが、茗巾一・一cmで、茎に糸巻きの跡のあるものがある。刀子ではないかと思ったが、他に刀身形の鏃もあり茎の巾が狭く糸巻きの跡がある等の事から鏃として聞く。

四、年代と保存

以上が発掘調査の結果であるが、前に述べたごとく、既に荒されていて屍床と遺物の関係を明らかにし得なかつたのは遺憾であった。しかしこの横穴古墳は高千穂地方の横穴の代表的なものの一つで、この地方の横穴の特徴は玄室の施設である。玄室に間仕切りを設けるもの、或いは枕状の施設を有するもの、または本墳のごとく、屍床を設くるものなど種々であるが、本墳は一穴中に四体分の屍床を設けている。これは言うまでもなく家族墓であり、それが古墳時代後期（今から一四〇〇～一三〇〇年前）のものであることを示している。

このようにこの古墳は高千穂の代表的な形を備えており、幸いに蓋石も残っているので学術上の資料として保存すべきであると思う。場

所も保存可能の所であるから、保存するよう要望して来たが、財教委も正しい形の横穴が少ないので保存したい意向である。ただ県の当該課に保存するよう要望して聞く必要があると思う。

高城町牧ノ原遺跡調査報告書

石川恒太郎

一、発見の動機

北諸県郡高城町大字大井手字牧ノ原は、高さ一〇mぐらいの広い台地で、前方後円墳三基と円墳一〇基がある古墳地帯であるが、去る四年二月に、ここの一〇号墳の南方約一〇mと三〇mの地点で箱式石棺二基が発見されたが、四三年一〇月ごとの農業構造改善事業のため基礎切下げとして表土層を深さ五〇cm引き下げたところ第一二号墳の北方約六mの道路傍に地下式古墳の天井部破壊による穴が開いて発見されたが、それとともに第一三号円墳の西北麓に箱式石棺の一部が露出していることが発見された。同町教育委員会よりその報告を受けたので同年一月一日県教育局社会教育課の加藤主事とともに現地に出張して調査したが、その際地下式古墳の堅穴を探すうち偶然その西方約三mのところに土塙墓一基を発見した。それで第一二号墳と石棺、土塙および地下式古墳の位置は第1図に示す通りであるが、以下これらのことについて調査の結果を概説しよう。

二、調査の結果

第一箱式石棺

箱式石棺は扁平な石を組み合わせて箱形を造っているもので、ほぼ東西に方位して第一三号円墳の西方の少し高いところにあり、西側の

石が露出し、その破壊口から棺内を覗見すれば人骨の遺存が見える。しかし一部が出ていただけであったから敢て発掘せず石の蓋を元の通りにして置いたが、問題は第一三号墳との関係である。

第一三号の円墳は周縁を削り取られて一・五〇mぐらい高くなっているが、原形はすこしあつた宮である。しかし箱式石棺はこの第一三号墳の主体であるとは考えられない。石棺のある位置は現在の地面より高くなっているが、これは畠地の盤下げをなしたためで、その以前には地表と同じ高さであったものと思われる。そして第一三号はこの石棺のあるところよりさらに約一m高い。そしてこも段をなしでいる。従って第一三号のものと周縁はこの石棺の西端附近まで建びていてものと思われる。そうするとこの石棺は第一三号墳の一部に含まれることになる。（写真1参照）そうするとこれは何を意味するのであるか。

われわれは、このような例を県北延岡市稻葉崎において経験したことがある。それは琴塚と呼ばれる自然の丘地を利用した大円墳の周囲に、すでに一〇數基の箱式石棺が見いだされている。その箱式石棺は千枚岩を利用しているものであるが、しかし内容は極めて古いものから須恵器の提瓶を伴うものまで出ている。従って箱式石棺も県下においては相当長い間利用されたことが知られる。次ぎにこの台地で先年

第1図 第13号墳棺土塚および地下式古墳位置見取図

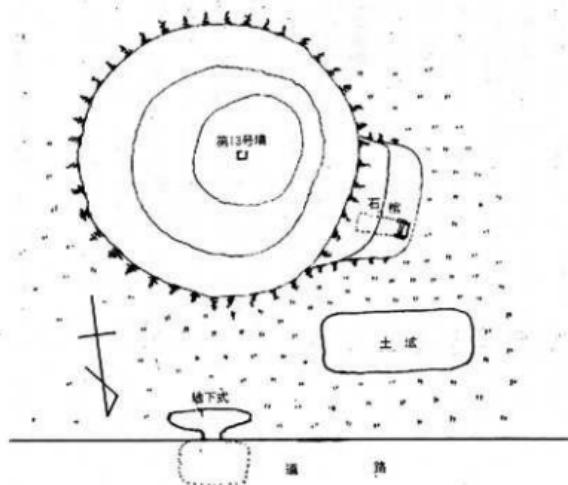


写真1 第13号円墳と箱式石棺の位置



見出された箱式石棺を見るに「昭和四二年度宮崎県文化財調査報告書」に渠原文藏氏が報告しているとく、劍と鉄鍔と爪柄を出しており、それが中期古墳の様相を示していると記されている。ただ鉄鍔が尖根式三本であることを思えば、中期でも後期に近いことが知られる。

この第一三号墳が、その主体にどのような棺槨を有するかは知らないけれども、恐らく中期古墳であろうと思われる。そうすると、これが主体以外にその墳丘の末端に箱式石棺を有するという事実は、延岡市の中塚例に近いと見るべきで、この石棺を発掘していないから確言はできないが、恐らくこれも中期の石棺で、発掘しても格別珍らしいものは出ないのでなかろうかと思われる。というのは恐らくは主墳の殉死者の陪塚に当るものと思われるからである。このように考える以外にここに箱式石棺の存在を合理的に説明することは困難である。

第二土壙墓

これは第1図に見られるごとく、第一三号円墳と地下式古墳との中間の西方にあるもので、初め地下式古墳の竪穴を見つけるために掘ったトレンチによって発見されたものである。この位置は地下式古墳の羨道入口の西側と土壙墓の東北隅が三・二五mのところであった。そして土壙はガラ崩れに倒れ込んでいてほほ東西に方位し、東西の長さ三・七〇m、巾一・五〇mの角丸長方形をなし、深さは約三〇cmで、東方がやや低い状態であった。西方と東方に粘土の堆存しているところがあったが、下層に粘土があるけれども、全体の床面に粘土を張つたものではなかった。

遺物は土壙の東壁から一・六m、北壁から七〇cmの床面に鉄鍔一本があつただけである。そしてこの鉄鍔には矢柄(鍔)の一部がついていて全体は二つに折れているが、全長一七cm、うち矢柄の長さ八・五cmで、鍔の長さは八・五cmである。鍔は直錐一cmで背に桜の皮を惹いているようである。鍔は甚だしく鏽化していて形を知り得ないが、巾一・三cmで長めである。写真2はこれを示す。

土壙墓は弥生期の墓で、舊て宮崎市池内町の玉水で一〇数基発見されたほか、延岡市貝ノ畑の弥生後期の住居跡その他で発見されているが、最近大坂湾沿岸の田能道跡(兵庫県)瓜生堂、勝浦、安満(何れも大阪府)などの諸跡で木棺墓が発見され、これらの木棺墓は上層内に木棺を入れているものであるから、從来土壙墓と呼ばれているものは、木棺墓の木棺が腐朽消失したのではないかという説があり、これは充分に価値ある説で、木棺墓といつても、木質の破片が残っている程度であるから、この説の正しさを知ることができる。従ってこの土壙も木棺墓である公算が大きいのであることを附言して置く。

第三地下式古墳

地下式古墳は高城町においては、先年香椎寺で発見されてから一度目の発見であった。前にも記したごとく、この土地を約五〇cm引き下げたために玄室の天井部を破壊して発見されたものである。写真3はその破壊口であるが、写真4に見えるごとく、道路(自動車のある所)のすぐ傍らで(人が見ている所)、左側(南方)の封土墳第一三号の北方約六mの位置である。現在の現地には牧草が植えている。

写真2 土 壤 内 に あ っ た 鉄 錆

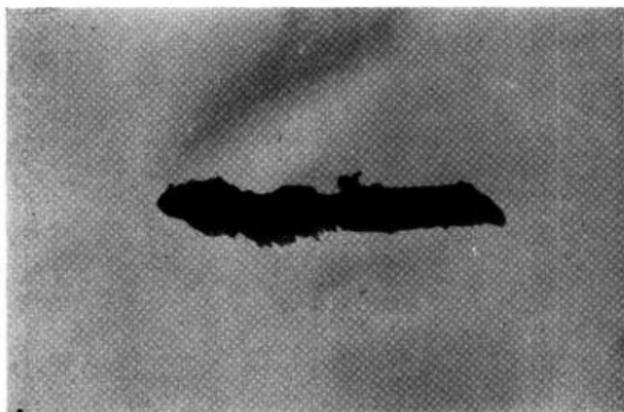


写真3 天 井 部 の 破 壊 口

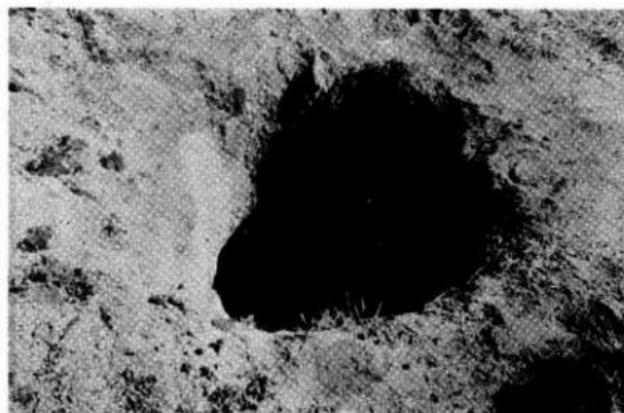
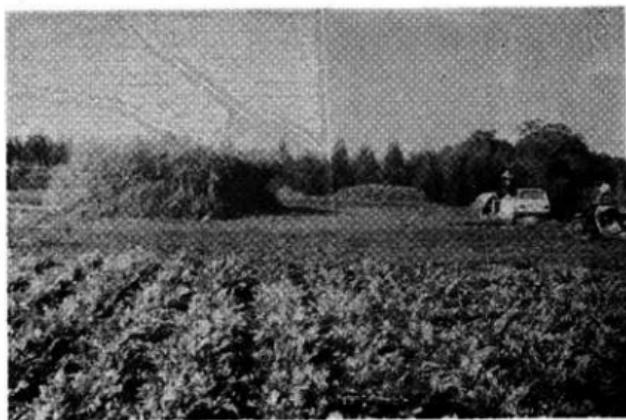


写真4 第13号墳（左）と地下式古墳（自動車の左
人の見ている所）の位置



その下に六〇~七五cmのボラ層があり、その下に二五~三〇cmの黒土層があり、その下はかなり深い粘土層となっている。この粘土層は、上の黒色土層が漸次褐色に変移しているが、古墳の玄室や羨道はこの粘土層に設けられている。それで玄室の床面は現在の地表から二・一m深いところにあり、古墳は玄室を南に羨道と堅穴を北にして営まれていたが、その方向は南北より八度ぐらい東に傾いていた。

玄室は東西に長い中の膨れた長方形で、むしろ橢円形に近い。東西の長さ二・三〇m、南北の中は東端で三三cm、中央で八六cm、西端で三〇cmあり、天井の高さは不明であるが、だいたい八〇cmぐらいであると思われる。天井は薄鉢形であったと思われるが、床面には何らの施設もなく、ただ西側が東端より約一〇cm低くなっていた。玄室の床面の中央に東を枕にして人骨一体が伸展葬されていたが、頭蓋骨は小さく割れており、腰骨と大軀骨が残っていたけれども、手を触れれば崩れ去る状態であった。副葬品は頭蓋骨の南西に南壁に接して、壁と平行して剣一口が鋒を東に向けて置かれ、その北側に接してこれと平行に鉄鎌一本が刃先を東に向けて置かれていただけであった。写真5はその状況を示す。剣と鉄鎌は写真6に見られる通りである。

羨道は玄室のほぼ中央北側に開口し、巾五二cm、高さ七二cm、長さ二〇cmで、先上りに床面が高くなつてお、丸い粘土で塞がれていた。堅穴は道路の下になつてるので掘ることができなかつた。

1. 剣一口

折れているが接合して全長三一・五cm、身長二六・三cm、身巾二・一cm、半ば鞘が接着して残っている。柄部は長さ六・二cm、巾一・五

第2図 高城町牧ノ原地下式古墳断面図

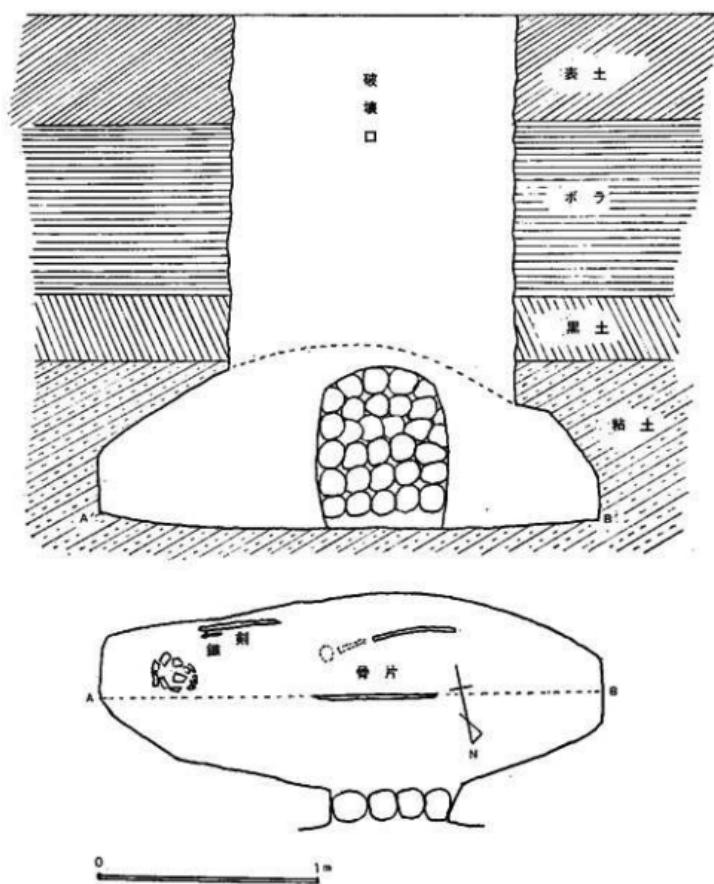
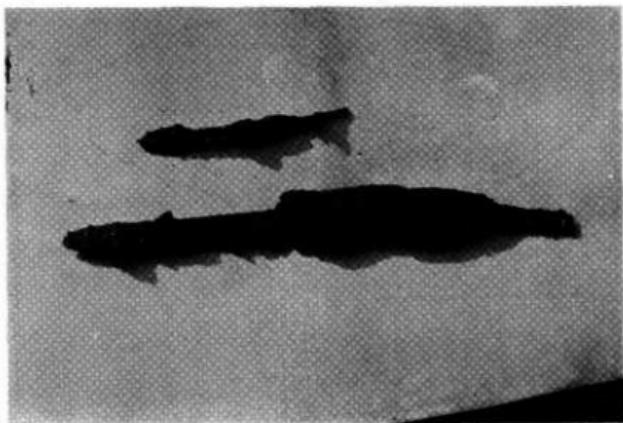


写真5 玄室内（中央白いのは頭蓋骨の破片）
（右壁に剣がかすかに見える）



写真6 剣と鉄錆



cmである。

2、鐵鎌一本

鉗形で全長一三・六cm、刃部の中一・七cmである。

以上がこの古墳の全貌であるが、地下式古墳時代中期から後期にかけて行われたこの地方特有の墓制である。しかし木墳のように形が小さく横長のものは、地下式古墳の中でも後期の形で、副葬品の少ないところもこれに応するものであつて、これは今から一三〇〇年ぐらい前の古墳である。なおこの調査には高城町教育委員会の教員のはか兩九州短大の学生八名、県立高城高校の生徒二名が参加協力されたことを附記して謝意を表する。

国富町本庄地下式第二二号墳調査報告

石川恒太郎

一、発見の動機

東諸県郡国富町の本庄町は市街地に封土墳や地下式古墳が多いので古来有名なところであるが、昭和四三年一月二八日町公民館（旧町役場）の西方の郵便局舎（旧警察）を鉄筋造りに改築中、その周間に溝を掘ったところが地下式古墳の天井部を破壊して穴が開き、中に人骨があつたので古墳であることが知られ、町教委に届け出たため、同町教委の連絡により同日直ちに県教育庁社会教育課の久保主事とともに現場に出張、同町教委職員の協力を得て調査を行つたが、同町の本庄で從來發見された確実な地下式古墳が二基あるので、これを木庄地下式第二二号墳と呼ぶこととした。

二、古墳の構造

この地層は地表から七七cmくらいの深さに表土があり、その下に約三五cmの厚さに黄色のローム層があり、その下に一六〇cmくらいの厚い褐色の粘土質土層があつて、その下は深いシラスの層となつてゐるが、この古墳は玄室や羨道などを粘土質土層に設け、玄室の床面はシラスになつていて、そして古墳は竪穴と横道を南北に、玄室を北にして營まれており、古墳の中軸線は南北の方向より八度東に傾いていた。玄室は南北に長く、長さ三・三〇m、巾は入口で一・五〇m、中

央で一・三〇m、奥駆で一mと奥にゆくほど狭くなつており、奥駆は中央がやや膨れでいる。床面はほとんど水平で、奥駆が入口より二cm低いだけである。

天井は切妻造りの屋根形をなし、棟の高さは一・二〇mで、北、東、西の三方の壁は床面から六〇cm内外の高さのところで五一〇cm巾の棚をなしており、棚は若干内側に傾いていた。羨道は玄室の南壁に開口しているが玄室の中央より若干西側に偏していた。羨道の巾は七七cm、高さは七五cmで長さ六〇cmで、その天井は丸く、床は玄室より先上りに高くなつていて、閉塞はされて居らず竪穴の土が羨道から玄室の南部まで流れ込んでいた。竪穴はその南にあつたが、隣りの人家があるので調査は不可能であった。（第一圖参照）

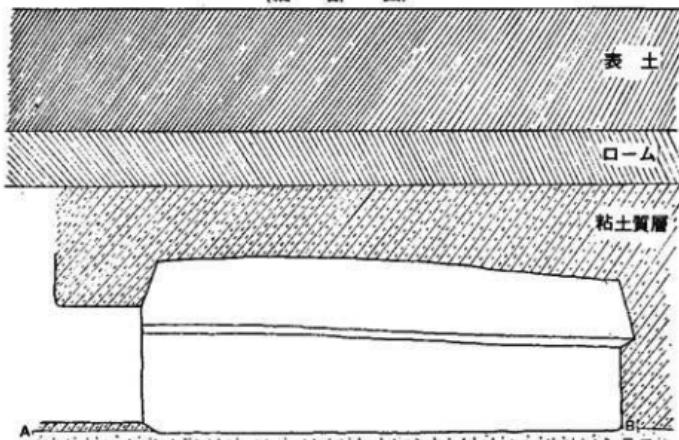
このように、この古墳の構造は竪穴と羨道とが一直線をなし羨道は玄室の長い方向に開口し、玄室は縱に長い長方形で家形をなしその形も比較的大きい。このような構造は地下式古墳では古い形式に属する。

三、遺物

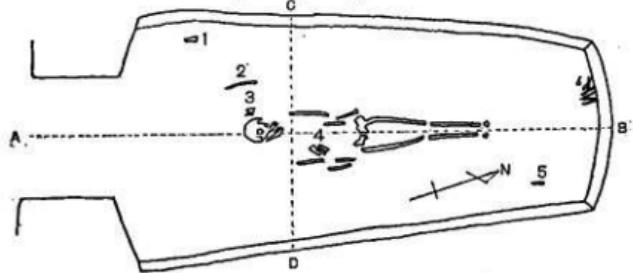
遺物はこの古墳の主体である人骨と副葬品であるが、人骨は玄室の中央に頭を南に足を北にして伸展葬されていた。副葬品は頭蓋骨のすぐ左上（西南）に平根の鐵鎌一個があり、その西南に約二〇cm距てて

第1図 国富町本庄地下式第22号埴輪洞

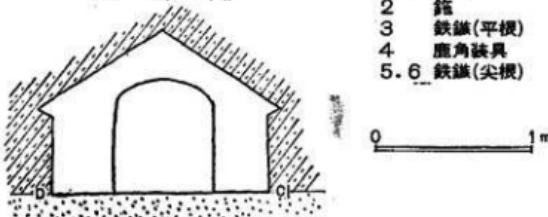
(縦 断 図)



A (平 面 図) B
C



(横 断 図)

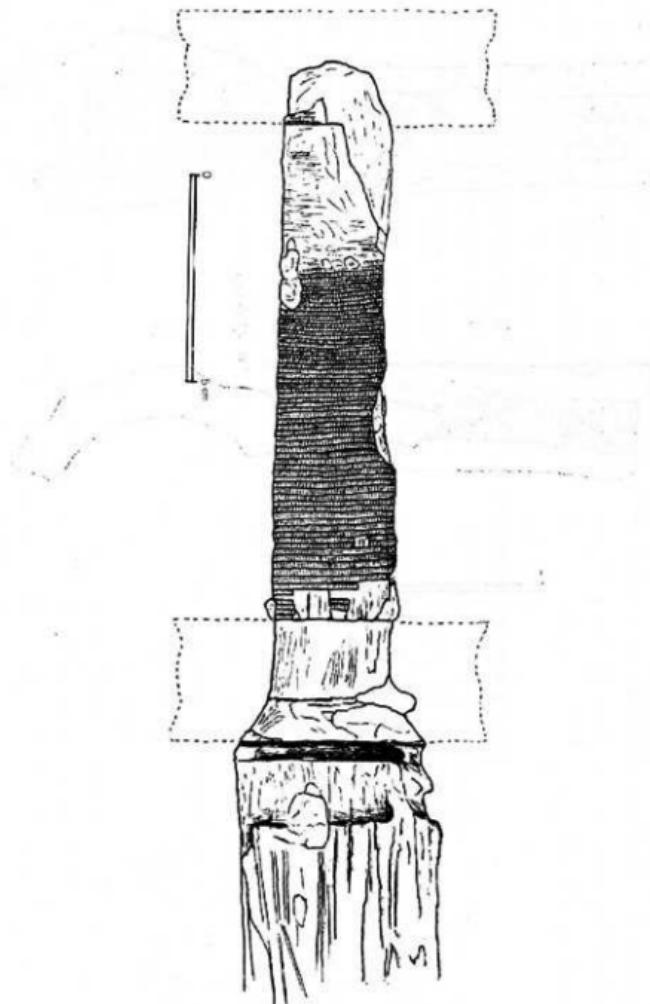


- 1 矛頭
- 2 鑓
- 3 鉄鑓(平模)
- 4 鹿角裝具
- 5. 6 鉄鑓(尖模)

写真1 玄室内の人骨



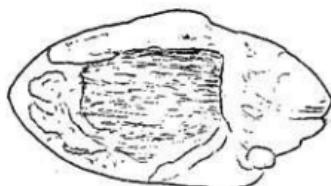
第2图 本庄地下式第22号坑出土鹿角拔刺尖洞图(局部)



第3圖 鹿角裝柄頭と鉤鉄実測図

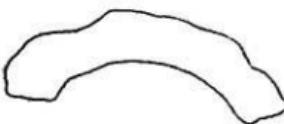
柄頭

同裏



鉤鉄

同上面



0 5cm

鉗が一本置かれ、さらにその西南に約三五cm距てて斧頭一箇が刃を北に向てあつた。また人骨の右（東）に接して腕から足のあたりにかけて人骨と平行して剣一口が置かれていたらしいが、われわれが行った時は、この剣はすでに町教育委員会に持ってきてあった。従って現場にはなかつたが、人骨の右上脛骨の左側に剣の柄頭と舞節の鹿角製品があつたから、この人はこの剣を右に抱いた格好で葬られていたことが知られる。すなわちこの剣は柄を南に鋒を北にして置かれていたものと思われる。また足の東北約五cmのところに鉄錐が一本、玄室の奥壁の西寄りの所に同じく鉄錐數本（何れも尖根）が斜めに立てかけたようにしてあつたが、思うにこれらの鉄錐は柄からはずり落ちたのである。以上がこの古墳の遺物の全部であった。

1. 人骨 一體

玄室の中央に伸展葬され、頭を南に足を北にして葬られていたが、骨は比較的よく保存され、頭蓋骨の頂上から足の應骨のあつた所までの長さは一・五三mであったから、肉がついていたとして一・五五m内外の人であつたろうと思われる。そして骨盤が大きくなないことや副葬品等から見て成人男子と考えられる。

2. 剣 一口

総長七三cm、柄長一六・五cm、柄には木質の上に太さ〇・一五cmの糸が重く巻かれており、この糸は柄頭に近づくにつれて細くなっている。そして柄の中三cm、厚さ二cmである。さらに柄には鹿角製の柄頭と、同じく鹿角製の舞節がついていた。従つて鹿角柄頭剣であるが、その着装されていた状態は第2図および写真4で示す通りである。身

の長は五六・五cm、身にも木質の鞘がよく残り、身巾は三・七cm、鞘巾五cm、鞘の厚さ四cmで、鞘は木の上に桜の皮が巻いてあつた。第2回で見られるごとく、鞘の口のところに巾二cmぐらい木質の無い部分があるが、ここにも紹飾があったものと考えられる。今は腐蝕して消失してしまっているが怒らしくはやはり鹿角製の舞節がついていたのであるが、ことにも紹飾があったものと考えられる。今は腐蝕して消失してしまっているが怒らしくはやはり鹿角製の舞節がついていたのであるが、ことにも紹飾があったものと考えられる。今は腐蝕して消

3. 鹿角製柄頭と舞節各 一個

柄頭は半ば壊れているが、図版および写真で見られるごとく、高さ二・八cm、長さ七・二cm、最広部の巾四cmで、両端の尖った梢円形をなしており、上下の大きさは同じ側面は中央がやや深んでいる。すなわち側面は上下に各〇・五cmの縁をめぐらし、その中央の巾一・五cm内外の帯状の部分に直弧文の半肉彫りの美しい彫刻が施されている。上面は平坦二cm、深さ二cmの四角な穴が設けられている。

舞節は半分しか残っていないが、これも同じ大きさの両端の尖った梢円形であったと思われるけれども、一端は腐蝕して長さ六・五cmを残している。巾一・五cmで、柄頭と同様の意匠で両側に各〇・七cmの縁があり、その中間の巾一cmの帯状のところに柄頭と同じ直弧文の半肉彫りの美しい彫刻がある。

この種の鹿角器具は、舊て国富町六野原の地下式第八号墳から出土した刀に、同じような半肉彫の鹿角による舞節が施こされていたことがあるが、鹿角製の柄頭の出土は本県では最初の出土である。

4. 奋 一箇

長さ七・五cm、刃渡四cmで、長方形のものである。袋縫の上端は巾

写真2 剣 柄

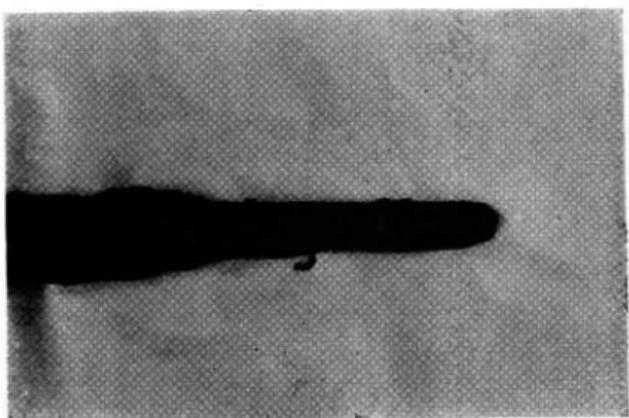


写真3 剑の柄頭と鍔飾

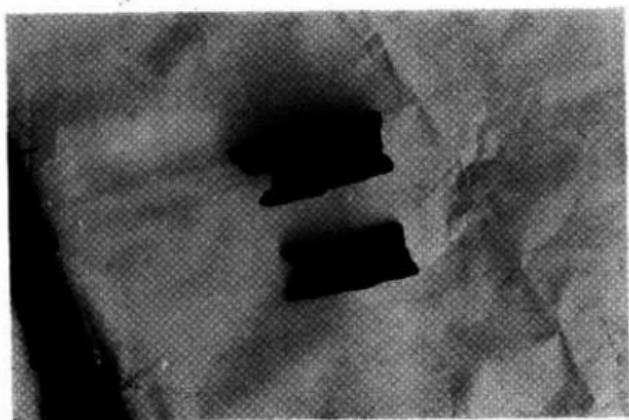


写真4 鹿角装の状態

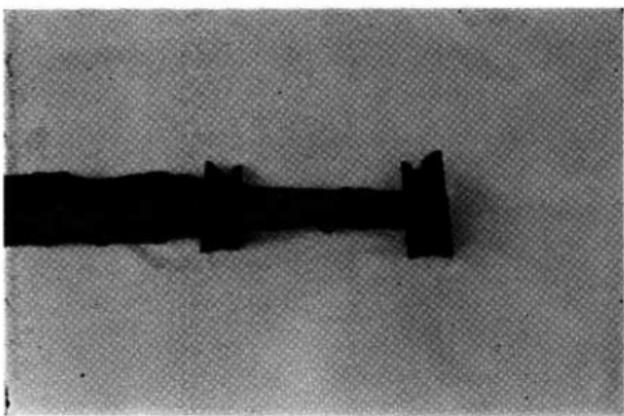


写真5 手頭

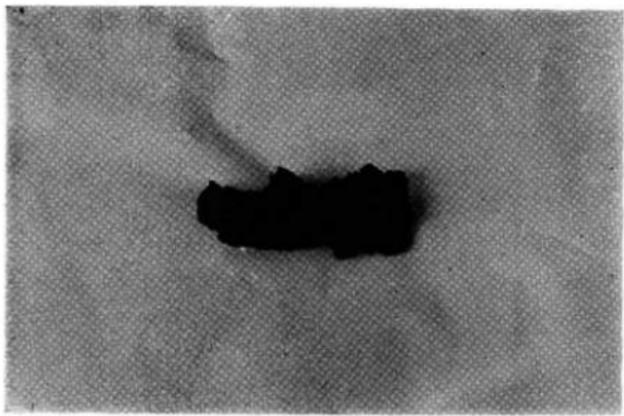


写真6 鉄 蘭

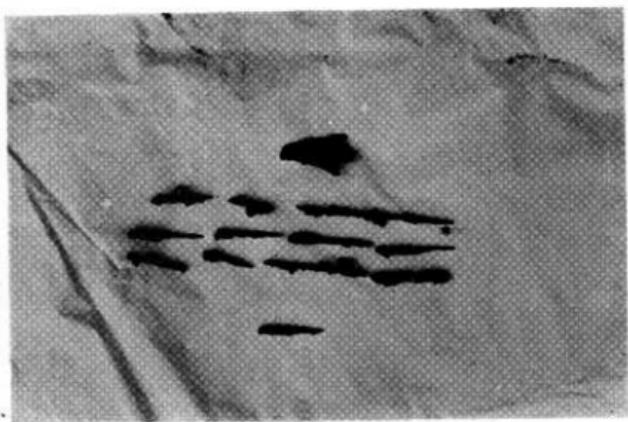
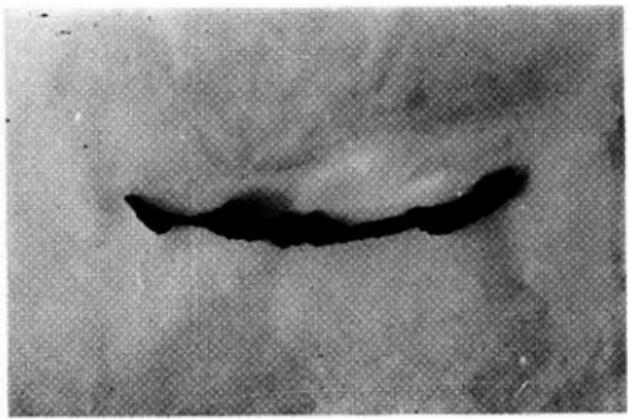


写真7 鉛



三cm、厚み二・五cmあり、珍らしいのは柄の部分が着装したまま残っている。

5、鉄鎌 八本分

總計八本分であるが、このうち頭蓋骨の近くにあつた一本だけが平根式で、他はみな尖根式である。平根式のものは無柄で逆刃を有し、長さ六cm、左右の逆刃間の巾五cm、中央に鎌が嵌み込まれている。他の七本は折れているものが多いがみな尖り根の刀身形である。

6、鎌 一本

これは三つに折れているが、接合して完全な形となる。總長二〇cm 鉄の骨のみを残すもので巾一cm、厚さ〇・三cm、先端の上反せる穂先は長さ四cm、巾一cmでほとんど彫られていない。また柄部も少し彎曲している。この鎌の出土で鹿角製の美事が彫刻が理解されるわけである。

四、特徴と年代

この古墳の特徴は、地下式古墳であつて玄室が長方形の床面と切妻造りの屋根形の天井および壁に棚状施設をもつてること、隧道が玄室の長方形の軸線上についていることと、この構造は地下式でも古い形式に属していることは前にも述べたが、さらに玄室内には人骨一体を中央に葬っていること、および副葬品中に鹿角柄頭の剣や平根式の鉄鎌、斧頭、鎌などがあり、特に鹿角製柄頭は古式のものであるから本墳は五世紀後半ごろ（約一四〇〇年ぐらい前）に葬られたものと考えられる。

松尾のイチヨウ

平田正一

一、所在地

宮崎県東臼杵郡椎葉村大字松尾三八三番地

二、所有者

松岡文朗

三、現状および形態

このイチヨウは北面して五ヶ瀬川に向って急傾斜で流れる斜面の中腹にある松尾庵落である。標高位は五〇〇メートルで、樹幹は北へ一二三度傾いて、株元は四一五度も傾いている。樹高は三一・二メートルであるが、株元が越物敷地の拡張のため埋立てられ四一五メートルは埋没しているらしい。実際の樹高は三五一六メートルに達するものと考えられる。根廻り大きさは埋立てのため推定し難いが相当大きいものと思われる。埋立て下面の根廻りは四・九八メートルである。樹勢は旺盛で、樹幹は円錐形で枝張りは偏向なく最下部の径二五・六メートルある。地上一〇メートル位から四本に分岐し、各分枝は径五〇一六〇厘米もある。

樹今は四〇〇年と推定される雌株で、種子はかなり着くが一般のものよりやゝおとっているという。花葉の形態は普通品であるが、この老木には著しい乳垂が発達している。その最大のものは厚真に示す様に並列して垂れ下っている。大きいものは長さ一メートル、径三〇厘米位の

ものもある。その形状は鐘乳石を思わせる。乳垂は地上一〇メートル位から北に向う側枝の中央部にも大きいものが発達しており、南に向う更に上位の枝では無数の余状のものもある。その昔は相当大きい一・六メートル位のものもあったという。

イチヨウの乳垂は一四一五年生の若令木でも発達するが老木に多生するものが一般である。日本のイチヨウ天然記念物一九件中、乳垂をもつ雌株は六で、雄株は四であつて、その半数におよんでいる。従つて乳垂の発達と雌雄株の関係はない。乳垂は幹から発する不定芽や發育中止の短枝あるいはそれから潜伏芽に、局部的に養分の過剰蓄積したもので、組織細胞中には多量の澱粉を含んでいる。雄株は果実を着けないので乳垂が多く発達するとも考えられている。乳垂は木こみの一種であつて土中にいると根の作用もするという。

四、由来

このイチヨウの木は前記松岡文朗氏のものであるが、同氏幼少のため、その管理は、現宮崎県議会議員・椎葉保氏が代行しておられる。同氏の説明ではその由来は次の通りであった。

椎葉村が旧幕時代に天領としてあった時代は人吉相良藩の依たく領であつて、下福良、大河内、松尾、不十野の四庄屋によつて治められていたという。松岡家は徳川開幕以来一五代も続いた松尾の庄屋であった。イチヨウの木は松岡家の屋敷、三〇アールの広大地の西北隅に

ある。怒らしく初代から庭先に植栽されたものと考えられる。前記株元埋立ては最近行つたものである。

秋になると山腹にある椎葉の各部落の家々は、このイチヨウの木の黄葉化の程度をみて、各自の収穫期を判断したという日標樹となつて現在に生きてきた。又その昔日向に出る椎葉街道が松尾を経由して猿崎を経て山道で南郷村の神門に出たという。その山道入口松尾の標として、このイチヨウの高木が日標に使われている。このイチヨウは傾斜面の中腹に高くそびえているため、しばしば落雷の奇撃に災されている。

五、保存の要件

このイチヨウはその樹形および大きさともに優れていて、宮崎県内天然記念物指定品、去川、田原、上野、飯野の巨木に匹敵している。加えて本樹の特性は著しい乳垂の発達である。この乳垂は樹勢の旺盛とともに今後ますます巨大なものとなる可能性は十分で、イチヨウの乳垂の九州における代表的なものである。天然記念物指定の熊本県小国町のものはこの乳垂が僅かに発達するのみであるし、県内指定品には全くなない。老令と巨木、乳垂発達は珍らしく学術標品としての価値は十分である。天然記念物として指定し後代に保存すべきものである。

六、文献

- 1、本田正次『植物文化財』二八一四〇、一九五七。
- 2、上原敬二『造園植物大図説(一)』、二七一六二、一九三五。

イチョウの乳垂



イチョウの株元



椎葉村松尾のイチゴ
(昭和13年9月2日撮影)



